

ウォルツの国際政治理論

信 夫 隆 司

要 旨 米国の国際政治学者、ケネス・ウォルツの国際政治理論は、現代国際政治理論の原点に位置づけられる。ウォルツのネオリアリズム（あるいは、構造的リアリズム）は、国際政治を構造という視点から科学的に理解しようとした初めての試みである。しかし、かれの理論は、国家の能力という物質的な意味合いを重視し、その結果、冷戦の終焉を十分に説明しているとはいえない。そこで、本稿では、あらためて、ウォルツのネオリアリズムの全体像を批判的に検討し、その上で、エージェントー構造問題という視点からウォルツ理論を整理しなおした。それにより、ウォルツ理論は、構造がエージェントに及ぼす影響のみを重視しすぎ、エージェントならびにその相互作用の分析が欠けていることが明らかになった。

キーワード ケネス・ウォルツ ネオリアリズム 国際構造 エージェントー構造問題 冷戦

1 ウォルツを論ずる意味

わたしは、これまで、米国の国際政治学者ケネス・ウォルツについて2つの論考を著してきた。最初は、10年以上前（信夫 1988b）、そして、最近、ウォルツについて、再度、考察してみた（信夫 2002）。ウォルツについての論考を著わしているからといって、ウォルツの国際政治理論に、全面的に共鳴しているわけではない。ただし、ウォルツ理論、あるいは、ウォルツが行なおうとしたことには、国際政治を学ぶ上において、本質的に重要なことがあると思っている。それは、政治指導者の特性や国家の属性、あるいは、それらの相互作用からではなく、国際政治の構造という視点から、国際政治を分析する試みを鮮明に打ち出している点である。

なぜ、このことが重要なのだろうか。この問題に答えるのは、それほど簡単ではない。なぜなら、現実にはわれわれが知ることができるのは、政治指導者の発言であり、行動であり、そして、それらを抽象化した外交政策や、国家間外交と呼んでいるものだからである。つまり、国際政治とか国際関係とは言っても、突き詰めると、人間の行動が基本になっている。とするならば、人間の行動、あるいは、それらを抽象化した国家の行動を追求

すれば、われわれは国際政治を理解できるのではないか、と考えられる。しかし、これは、ちょうど社会学に対する心理学のようなものである。つまり、個人の心理を理解することによって、果たして社会を理解することができるのか、という問題である。おそらく、それは無理だろう。友人や家族の心理を理解できても、それで社会を理解したとはいえない。ウォルツの国際政治理論は、ネオリアリズム、あるいは、構造的リアリズムと言われているように、構造を用い、国際政治を分析しようとしている。しかし、構造とは何かと問われた場合、それ自体、自明の概念ではない。

つぎに、わたしがウォルツ理論に興味があるのは、ウォルツ以後の国際政治理論が、ウォルツ理論との批判的な対話を踏まえ、発展してきていると考えられるからである（Walt 1998）。たとえば、ロバート・コヘインの国際制度論は、ウォルツの基本的前提を受け入れつつも、場合によっては、国家間に協調が成り立つことを明らかにしようとしている¹⁾（Keohane 1984）。その意味で、コヘインはウォルツよりも少しは明るい世界を描き出している。その際、重要な役割を果たすのが、国家間に情報を提供し、裏切りを防ぐ制度の役割である。また、近年、重要な国際政治理論として登場したのがコンストラクティヴィズムである。こ

れはおおきく2つに分けることができる²⁾。ひとつは、科学に認識論上の特権を認める実証主義コンストラクティヴィズムである。アレクサンダー・ウェントに代表される³⁾。ウォルツの理論的前提を受け入れつつも、ウォルツのアナーキーやインタレストが唯物論的であることを批判し、アイデンティティ／インタレストとアナーキーとの相互構成を重視した観念的構造主義を提示している (Wendt 1999)。もうひとつが、ポスト実証主義コンストラクティヴィズムである。ポスト・モダン、フェミニズム、批判理論などが挙げられる。こちらは、現行の国際政治の枠組み自体を問題にし、それが生まれた原点に遡って批判的な検討を試みる。その批判の主たる対象がウォルツ理論である。このように、主要な国際政治理論の多くが、何らかの意味でウォルツ理論に対抗する形で理論構築を行っているという共通点が見られる。その意味から、ウォルツ理論を十分に把握しておくことは、他の国際政治理論を理解する上においても不可欠な作業といえる。

さらに、リアリズムやネオリアリズムは、国際政治の本質を突いているのではないか、という思いを拭い去ることができない。つまり、国際政治を本当に規定しているのは何なのかという問題である。現実の国際政治においても、冷戦終焉により、一時は影響力を失ったかに見られたネオリアリズム的な見方が、米国の一国覇権的な傾向と相俟って、その力を盛り返しているようにも見られる (山本 2000: 54)。とくに、2001年9月11日の米国における同時多発テロの勃発以降、パワーというものの重要性が再認識されつつある。それは、ネオコンという形で理論化され、また、米国の外交政策の支柱をなしている⁴⁾。もちろん、国際政治はすべてがパワーによって規定されているとは思えないし、逆に、すべてが観念によって支配されているとも考えられない。ただ、どんな社会にも何らかの形で警察官の役割を果たす者が存在するように、国際社会における最低限の秩序維持のためには、パワーが必要になってくるだろう。そうでなければ、それこそ無法者が支配する世界

となってしまう。その意味で、ウォルツ理論は、依然として、重要な理論であると思われる。

さて、ウォルツ理論を理解する上で、もっとも重要な文献として、*Theory of International Politics* (Waltz 1979) を挙げることに異論はないだろう⁵⁾。同書は、ネオリアリズムを代表する著作であることは間違いない⁶⁾ (Donnelly 2000: 16)。たとえば、マイケル・バンクスは、「一冊の本としては、もっとも広範に読まれ、ネオリアリズムに貢献してきた」 (Banks 1985: 14) と述べる。また、バリー・ブーザン等は、同書の出版以来、「ネオリアリズムは、国際政治理論における支配的な思想学派となった」 (Buzan et al. 1993: 1) と指摘する。このウォルツの著作には、つぎの3つの目的があったのではないと思われる。

第1は、ウォルツのいわゆる第3のイメージから、国際政治理論を構築することである (Waltz 1986: 322)。ウォルツは1959年に *Man, the State, and War* (Waltz 1959) を出版し、その中で、戦争の原因として、人間、国内社会、国際構造という3つのイメージを提示した⁷⁾。そして、ウォルツが達した結論は、国際政治のアナーキーな構造 (第3のイメージ) が戦争の根本的な原因である、というものであった。アナーキーの構造によって、戦争が不可避免的に起こることをウォルツは明らかにしようとした (Waltz 1959: 232-238)。逆に言えば、国際政治において、国家間の協調を確立する構造的なむずかしさが明らかにされた。もちろん、これによって、特定の戦争がなぜ起こるのかが説明されるわけではない。特定の戦争の原因を探るためには、個人あるいは国内社会に分析の焦点をあてなければならない。とはいえ、第3のイメージ (国際構造のアナーキー性)、つまり、国際政治全体の枠組みがなければ、国際政治を理解し、国際政治の結果を予測することは不可能になる。それから20年を経て、*Theory of International Politics*により、まさに、この第3のイメージによる国際政治理論の構築が図られたのである。

第2の目的として、その当時、おおきな影響力

を有していた、いわゆる相互依存論 (Keohane and Nye 1977) に対して反撃を試み、相互依存論の問題点を理論的に明らかにすることがあったと思われる (Burchill 1996: 83)。コヘインとジョセフ・ナイのトランズナショナル・リレーションの問題提起は、国際政治におけるもっとも重要かつ中心的なアクターが国家であるという前提に挑戦しただけでなく、国際システムのレベルと国家のレベルという区別をきわめてあいまいにしてみようという問題もあった。このことが、国際システム・レベルを中心とした理論を構築しなければならないとするひとつの動機をウォルツに与えたのではないと思われる。つまり、トランズナショナルに活躍する経済的プレイヤーによって国家の重要性が相対的に低下していると考えられるようになった。これに対して、ウォルツは、行動主義のいわば総仕上げとして、科学的な装いを凝らした新たなリアリズムによって、リアリズムの復権を図ろうとしたのではなからうか。

第3の目的は、ハンス・モーゲンソーに代表される古典的リアリズムの最大の問題点、つまり、安全保障のジレンマをいかに克服するか、にあったのではないだろうか。モーゲンソーのように、国家が際限なくパワーを追求したのでは、安全保障のジレンマという桎梏から逃れることはできない。そこで、ウォルツは、国家がむやみにパワーを追求するのではなく、アナーキーの前提から国家は安全を追求し、安全を追求すべきものと指定した。ウォルツのネオリアリズムの世界が、妙に、秩序の保たれたものである理由がここにあると思われる。

さて、本稿は、あらためて、わたしなりに、国際政治を構造によって理解しようとするウォルツの〈ネオリアリズム〉、あるいは、〈構造的リアリズム〉を明らかにし⁸⁾、その評価を行なうことが目的である。そのために、本稿はつぎのように構成される。第2節では、ウォルツの言う還元主義とは何かについて、ホブスン、レーニン、モーゲンソーを参照しながら検討する。その上で、ウォルツのシステム・アプローチとの違いを明らかにする。また、ウォルツのシステム・アプロ

チの概要を述べる。第3節は、ネオリアリズムの核心部分であるシステムと構造について検討する。ウォルツの考えるエージェント、構造、エージェントと構造の関係を分析する。第4節は、ウォルツのもっとも重要な理論であるバランス・オブ・パワー理論の概要を述べ、この理論の具体的な適用例を検討する。第5節は、エージェント・構造問題という視点から、ウォルツ理論を整理し直すと共に、ウォルツ理論の評価を行ないたい。

2 還元主義とシステム理論

(1) 還元主義とは何か

ウォルツはいわゆる構造的リアリズムを提唱した。その前提として、国際関係においては同じ結果が繰り返し現れるという歴史認識が存在する。ウォルツ曰く、「国際政治の構造 (texture) はきわめて一定のままであり、パターンは繰り返され、そして出来事は際限なく繰り返される。国際的に一般的となっている関係は、その種類や性質が急激に変化するといったことはまずない。逆に、その関係は驚くほど一貫しているという特徴がある」 (Waltz 1979: 66)。それでは、ウォルツが国際関係における一貫性として考えているものは何であろうか。この答えは、〈国際政治のアナーキーの特性〉である。国際政治のアナーキー性が、国際関係の中に同じことが繰り返される理由を説明してくれる (Waltz 1979: 66)。したがって、古代ギリシャの昔から今日にいたるまで、数千年にわたり、国際関係には同じ原理が働いてきたとされる。そして、このアナーキー性は、国際関係を構成するユニット間につねに対立が存在することを意味する⁹⁾。ユニットが、都市国家、帝国、国民国家と変わったとしても、この対立の構造は不変であり、本質的なものである。このアナーキーの中で、ユニットにより繰り返されるパターンがある。それが、ウォルツの国際政治理論の中核をなすバランス・オブ・パワーである。つまり、アナーキーな世界において、ユニットはバランス・オブ・パワーとその崩壊 (戦争)

を繰り返してきたとウォルツは考える。

さらに、ウォルツが国際関係の＜継続性＞をいわば＜国際構造＞のみから説明しようとしたことには、信仰的ともいえる理論崇拝がある。ウォルツによれば、いくらデータを収集しても、それ自体がわれわれに何かを語りかけてくれるものではない。また、観察や経験だけで因果関係が理解されるわけでもない (Waltz 1979: 4)。ある意味で、経験的知識というのは無限に存在しうる。そこで、われわれは、何らかの指針によって、必要な情報を集め、あるいはその情報を組み立て、ひとつのまとまりのある知識にする必要がある (Waltz 1979: 5)。その指針となるのが＜理論＞である。ウォルツは＜法則＞と＜理論＞の違いを強調する。＜法則＞は、変数間の関係を確立するものである (Waltz 1979: 1)。「もしaが発生すれば、結果としてbが起こる」という記述は、＜法則＞の一般的な具体例である。そして、もしこのa、bという変数間の関係が不変であれば、その法則は絶対的なものである (Waltz 1979: 1)。また、この変数間の関係がきわめてランダムなものであれば、そこに法則を定立することができなくなる。この変数間の関係のランダムから不変の間には、確率の問題が残る。＜法則＞とは、因果関係に普遍性や一定の確実性があることを明らかにしたものである。これに対して、＜理論＞は、なぜその事実関係が得られるのか、という理由を示す。したがって、＜法則＞は事実関係の観察によって＜発見＞できるが、＜理論＞は＜発明＞される、とウォルツは述べる (Waltz 1979: 5)。

ウォルツは以上のような国際関係の事実認識、それに理論の基本的な考え方から、国際政治理論の還元主義的アプローチをきびしく批判し、つぎのように主張する。「ここ数十年間に膨大な国際政治研究が行われてきたが、これらの研究から得られた説明能力は乏しく、これが国際政治研究を不振に陥らせていると考えられる。何らの蓄積もなされていないようであり、批判でさえもそのようである。その代わり同じ類の要約とうわべだけの批判が何度も行われ、同じ種類の過ちが繰り返

されている」 (Waltz 1979: 18)。

このようにウォルツは、これまでの国際政治理論に手厳しい批判を加えている。これは、あらゆる国際政治理論が何らかの意味で還元主義であったことに起因しているとウォルツは指摘する。ウォルツによれば、還元主義とは、部分の研究を通して全体を知ろうとする研究方法である¹⁰⁾ (Waltz 1979: 18-19)。還元主義者によれば、全体は、部分の属性とその相互作用を知ることによって理解される。国際関係論では、国際関係を、心理学的要因、社会心理学的要因、国家の政治的特性あるいは経済的特性などによって説明しようとするのが還元主義である (Waltz 1979: 19)。還元主義者の理論は、国際的な結果を説明するのに、国家レベルあるいは国家よりも下位レベルの要素、またはそれらの要素を組み合わせて行なう。国内の力によって外部的な結果がもたらされるとというのが、この理論の主張するところである。N (国内の力 national forces) → X (外部的結果 external outcomes) というのがそのパターンである。国際システムがもしこのように考えられるなら、それは国内の力の結果にしかすぎない (Waltz 1979: 60)。

この還元主義理論の典型例として、ウォルツはホブスンとレーニンの帝国主義論を挙げ (ホブスン 1951, 1952; レーニン 1956)、かなりの頁を割いて分析している (Waltz 1979: 19-27)。ある意味で、ウォルツはホブスンとレーニンの帝国主義の＜理論＞をきわめて高く評価している。その理由は、かれらが帝国主義の経済理論を発展させているからである。そして、それだけにとどまらず、かれらの理論は、明瞭であり、少数の要因が組み入れられ、それでいて国際関係におけるもっとも重要な現象である戦争がなぜ起こるのかが説明できるとしているからである。さらに、この分析から平和がもたらされる条件も示され、その結果、予測も可能であるという (Waltz 1979: 19-20)。レーニンの帝国主義論は、ホブスンのそれを基本的に受け継いでいる。両者の違いは、帝国主義をなくすにはどのようにしたらよいかという点にあ

る。ホブズンは資本主義内における社会の改良を唱えるのに対し、レーニンマルクス主義理論に依拠し、資本主義それ自体をなくしてしまうべきだと主張する (Waltz 1979: 23)。ここでは、ホブズンの帝国主義論を中心に検討する。

ウォルツによれば、ホブズンの理論は、国内経済の作用についての理論である。つまり、過剰貯蓄、生産拡大、過小消費という国内での悪循環を断ち切るために、海外での経済的利益の獲得をめざしたのが帝国主義である。こうした富の不公平な配分こそが帝国主義の原因であると主張した。したがって、過剰貯蓄を是正し、消費の拡大によって、可能なかぎり平等な社会を作ることを国家は目標とすべきであると考へた。ホブズンは国家の経済的属性から結果を予測する誤りを犯しているとウォルツは主張する。つまり、資本主義国家の経済的属性から対外的な行動を推測することができると信じたという。「彼は問題を起こす人だ」というのと「彼は問題を起こす」という2つの文章の差異を無視しているに等しいとウォルツは述べる。ちょうど、平和を維持しようとする国家が平和を維持できないように、問題を起こす人も問題を起こさないかもしれないからである。結果がアクターの属性はもちろん、アクターが置かれている状況にも依存しているなら、属性から結果を予測できない (Waltz 1979: 60-61)。

このような還元主義は、古典的リアリズムにおいても用いられている。モーゲンソーの『国際政治』(モーゲンソー 1986)を中心にしてみよう。同書は、リアリズムのパラダイムを確立する上で、もっとも重要な著作であったことは間違いない (Vasquez 1983: 17)。モーゲンソーの国際政治理論が還元主義であるといわれる理由は2つあるのではないと思われる。ひとつは、「力の欲求」という固定的な人間の本性から政治(国際政治を含めて)を権力闘争として規定した点である¹¹⁾ (モーゲンソー 1986: 4, 30-37)。これは、いわば、生物学的リアリズムと言える (Donnelly 2000: 11; Waltz 1959: 21-22; Waltz 1990: 35)。もうひとつは、あまり触れられないが、モーゲンソーは

国家に2つのインタレストがあることを前提に議論を進めているのではないと思われる点である。ひとつは権力の維持に専心する現状維持国家であり、他は権力の拡大を追求する帝国主義国家である¹²⁾ (モーゲンソー 1986: 43-78)。モーゲンソーは、いずれも国家ではなく、〈政策〉として提示し、「すでに存在する帝国の保持を目的とした対外政策は、必ずしも帝国主義ではない」(モーゲンソー 1986: 50)とも述べている。ここでの現状維持国家・帝国主義国家とは、その国が帝国主義の意図を有しているか否かによる区別である。モーゲンソーは、まさに、個人レベルと国家レベルから国際政治を説明しようとしたわけである。ただ、人間の本性が善であるか悪であるか、ある国が現状維持国なのかそれとも帝国主義国なのかを判断するのはむずかしい。これに対し、ウォルツの場合、国際政治理論によって、いくつかの概念とその構造を会得すれば、誰もが国際政治を理解できるようになる。

(2) ウォルツ以前のシステム・アプローチ

ウォルツはシステム・アプローチを展開したが、ウォルツがその嚆矢というわけではない。ウォルツ以前にも、既に、モートン・カプラン (Kaplan 1957)、スタンレー・ホフマン (Hoffmann 1959)、リチャード・ローズクランズ (Rosecrance 1963)などがシステム・アプローチを提示していた。とは言っても、ウォルツは、これまでのシステム理論と言われるものも、還元主義の方法がとられてきたと考えている。つまり、システムは、ユニットが有する属性とその相互作用の総体と考えられていたという。しかし、これでは、国際システムをたんに記述する域を出ておらず、国際システムの構造を明らかにしていない、とウォルツは批判する (Waltz 1979: 50)。「このようにして、システム・レベルとは、すべての生産物となり、まったく生産的ではない」(Waltz 1979: 50)。生産的であるためには、システム・レベルでは、システムの特徴を明らかにし、これらの特性が「システム内の相互に作用しあうユニットを制限し、影響を

及ぼす力として」(Waltz 1979: 72)、どのように作用しあうかを説明しなければならない。

ウォルツによれば、ホフマンとローズクランスの場合、重要な説明は国家および政治家のレベルに見いだされる(Waltz 1979: 50)。システム・アプローチと言えるからには、ユニットに対して何らかの因果的な影響力を有するシステム・レベルの概念として構造をとらえる必要がある。ウォルツがとくに注目したのがカプランである。ウォルツは、カプランがシステム・アプローチを用いようとした数少ない理論家であるとしている(Waltz 1979: 50)。そこで、カプランのシステム理論を概観し、カプランの理論が、なにゆえ、還元主義と考えられているのかを検討したい¹³⁾。

ウォルツによれば、カプランの理論を評価すべき基準は、「システム内のさまざまな部分とさまざまなレベルに作用している因果的力を、カプランがどのように定義し、位置づけ、評価し、そして関連づけているか」(Waltz 1979: 50)ということに尽きるという。カプランは統合の程度という視点からシステムを6つに分類している。さらに、それぞれのシステムには5つの変数が規定されている。そこでまず、システムから見ていこう。

カプランは、超安定的な国際システムというのが考えられるとし、その中に6つの<均衡>(equilibrium)状態があるという。ここでいう超安定的とは、行動の安定的なパターンが存在する状態と考えてよいと思われる(Kaplan 1957: 7)。カプランの提示する6つの国際システムは、以下のとおりである¹⁴⁾(Kaplan 1957: 21)。

- 1) バランス・オブ・パワー・システム(The Balance of Power System)
- 2) ゆるやかな2極システム(The Loose Bipolar System)
- 3) かたい2極システム(The Tight Bipolar System)
- 4) 普遍的国際システム(The Universal International System)
- 5) 階層的国際システム(The Hierarchical

International System)

6) ユニットが拒否権を有する国際システム (The Unit Veto International System)

この6つの国際システムについて具体例を挙げながら、説明していこう。<バランス・オブ・パワー・システム>とは、ヨーロッパを中心とする近代の国際関係をさしている。このシステムにおけるアクターは国家であり、アクターの数最低5カ国存在しなければならない。<ゆるやかな2極システム>とは米ソ対立という、いわゆる第2次世界大戦後の冷戦構造をさしている。<かたい2極システム>は<ゆるやかな2極システム>と似ているが、前者の場合、ブロック内のアクターが階層的に組織されているという特徴を有する。<普遍的国際システム>とは国家というサブシステムからなる一種の連邦システムと考えられる。<階層的国際システム>とは、民主的であるか専制的であるかを問わず、単一の世界国家をさす。<ユニットが拒否権を有する国際システム>を比喩的に言えば、各国が他のいずれの国に対しても核抑止力を有するような関係をさしている。この6つの国際システムのうち、<バランス・オブ・パワー・システム>と<ゆるやかな2極システム>だけが、歴史上、実在し、残りの4つは仮説的なものであるという。

カプランの6つの国際システムを概観しただけでも、かなり異質なものが混在しているのは明白である。バランス・オブ・パワー、それに<ゆるやか>であれ、<かたい>ものであれ2極システムは、アナーキーなシステムであろう。これに対し、普遍的ならびに階層的国際システムはアナーキーではなく、国際的な国内システムとでも呼ぶことができる。もちろん、システムの分類だけでは、カプランが何を言わんとしているのか、明らかではない。カプランは、システムの研究には、変数間の関係が含まれる必要があると考えている。たとえば、物理学者の場合には、質量、エネルギー、熱、圧力といった変数が用いられる。そして、6つの国際システムのそれぞれに、(1)シ

システムの本質的ルール、(2)変容のルール、(3)アクターを分類する変数、(4)能力の変数、(5)情報の変数、という5つの変数がある。＜システムの本質的なルール＞とは、あるシステムにおけるアクター間の一般的な関係を記述するルールである。＜変容のルール＞でカプランが何を言いたいのかはかならずしも明確でないが、動的なシステムにおいて、変化の法則があることが示唆されている¹⁵⁾。＜アクターを分類する変数＞の具体例として、国家、同盟、国際機構などが挙げられている。さらに、国家は専制的と民主的に分類される。＜能力の変数＞とは、アクターが行為を遂行するための物理的能力をさす。たとえば、領土、人口、工業力、技術、軍事力、輸送・コミュニケーション能力などである。＜情報の能力＞とは、能力の変数に近いが、異なるのは、能力の変数をどのように認知するかという能力をさしている点である (Kaplan 1957: 9-12)。これらの変数間の優先順位は不明だが、カプランが最初に挙げ、そして、もっとも多くの頁を割いて説明しているのが、＜システムの本質的ルール＞である。おそらく、これがもっとも重要な変数ということになるのだろう。実は、各国際システムごとに上記5つの変数が記述されているが、ここではバランス・オブ・パワー・システムにおけるシステムの本質的ルールだけを検討してみたい。それは、つぎのような6つのルールからなる。なお、バランス・オブ・パワー・システムにおけるアクターは国家、それも少なくとも5カ国以上の国家ということなので、以下のルールはこうした国家に向けられている。

- 1) 能力の増大をはかれ。ただし、戦うよりも交渉を選べ。
- 2) 能力を増大させる機会を見逃すよりも戦え。
- 3) 主要な国家アクターを減ぼすよりも、戦いを止めよ。
- 4) システム全体に対して支配的な立場に立とうとするいかなる同盟あるいは単一アクターにも反対せよ。

- 5) 超国家的な組織原理にしたがうアクターを制約せよ。
- 6) 主要な国家アクターが敗北した場合でも、役割パートナーとして歓迎し、システムに再登場することを容認せよ。また、これまで脇役のアクターだったものを主要なアクターの分類に入れるようにせよ。すべての主要なアクターを、歓迎すべき役割パートナーとして扱え (Kaplan 1957: 23)。

ウォルツはカプランの本質的ルールをつぎの3つに整理している。

- A できるだけ安上がりに能力の増大を図るようにせよ (カプランの1) と2))
- B 他のアクターがルールAにしたがって行為する場合、そのアクターに対して自らを防衛せよ (カプランの4) と5))
- C システムにとって不可欠なユニットの数を維持するよう努めよ (カプランの3) と6)) (Waltz 1979: 52)

ただ、カプランの本質的ルールには明らかに矛盾がある。たとえば、1)と2)などは＜戦い＞を重視すべきなのか、それとも＜交渉＞を重視すべきなのか不明である。また、バランス・オブ・パワー・システムを破壊するような行為をしてはいけないという、一種の＜規範＞が作用するかのようになっている。

さて、これ以上、詳しくカプランの国際システムを説明する必要はないと思われる。カプランの国際システムは、普遍的国際システムとか階層的国際システムといったように、本来、国際システムとはいえないものも含まれている。また、たとえば、上述のバランス・オブ・パワー・システムにおけるシステムの本質的ルールを見ても、これらのルールは国家アクターに向けられるのであるから、国家アクターがこれらのルールにしたがって行為する場合に、バランス・オブ・パワー・システムが生まれると解釈される。そこで、問題なのは、それではシステムそれ自体は国家アクターに対してどのような制約要因として機能している

かである (Waltz 1979: 57)。カプランの国際システム論においてはこうした視点が見られないことから、ウォルツはカプランの国際システム論を還元主義であると非難する¹⁶⁾。

(3) ウォルツのシステム・アプローチの概要

つぎに、ウォルツのシステム論を検討することにしよう。ウォルツによれば、システム・アプローチが必要とされる場合というのは、結果が変数の属性とその相互作用によって影響を受けているだけでなく、変数が組織されている方法によっても影響を受けている場合である (Waltz 1979: 39)。ユニットがどのように組織されているかがユニットの行動と相互作用に影響を及ぼすなら、われわれはシステムのユニットの特性、目的、相互作用を知るだけでは、結果を予測したり、あるいは、理解したりすることができない (Waltz 1979: 39)。

このことをもう少し具体的な場面に置き換えて考えてみよう。たとえば、ある国が現状維持的な政策をとっているとする。そして、その国は現在の国際状況に満足しており、できればこの状況が続けばよいと考えている。また、この国は他国との貿易関係が活発であり、同盟も結んでいるとする。こうした条件が与えられた場合、われわれはどのようにその国が行動すると考えられるだろうか。確かにその国がとる外交政策の方向性くらいは得られそうである。現状維持国であり、現状に満足しているなら、今の国際システムのルールを変えることは望まないであろう。他国に対して侵略的な政策をとることも可能性としては低い。そこまでは理解できる。しかし、問題はその国が他国（現状維持国のこともあれば帝国主義国のこともあろう）と対立する場合に、国際関係はどのようなになるかである。おそらく、これは現状維持国だけを分析したのでは不可能である。

どのような場合にシステム・アプローチは有効なのであろうか。ウォルツによれば、結果をもたらすと思われるエージェントが変化していくにもかかわらず、同じ様な結果が生じる場合である (Waltz 1979: 39)。

「[国際政治の] 結果を生み出すと思われるエージェントの違いにもかかわらず、結果の類似性が一般に存在する場合には、分析的なアプローチがうまくいかないのではないかという疑問が出てくる。何かがエージェントに対する制約要因として働いており、エージェントとエージェントの行為によってもたらされる結果との間に介在している。国際政治では、システム・レベルの力が働いているように思われる」 (Waltz 1979: 39)。

具体的に、国家がどのような国であるのか、現状維持国であるのか、帝国主義国であるのか、あるいは国家がどのような意図を有しているのかを問わず、いつも同じ様な結果が生じる場合、国家の属性、意図、相互作用をいくら探っても意味がない。つまり、こうした属性や意図を超えた何かが国家の行動に制約要因として働いていることが示唆される。

ウォルツは、古代ギリシャの都市国家間においても、中世ヨーロッパの封建領主間においても、さらには近世以降の国民国家間においても同じことが繰り返されていると考える。現代におけるアラブとユダヤ人の対立は、紀元前2世紀においてもみられた。第1次世界大戦と第2次世界大戦に参戦した主要国はほとんど変わらなかった (Waltz 1979: 66)。また、たとえ個々の国家が異なる意図を有していたとしても、国際関係の歴史においては、アクターの意図に対応した結果が生み出されることはほとんどない (Waltz 1979: 65)。国家の意図はなぜ繰り返しその達成が妨害されるのか、という問いに対して、ウォルツはつぎのように答える。「個々の国家の特性と動機の中には見つからない原因が、アクター間に集合的に作用している」 (Waltz 1979: 65)。個々の国家の意図とは関係なく、歴史は作られるという見方には疑問もあるが、一応、このことを前提として、ウォルツ理論の分析を続けよう。

国際政治の中に繰り返し現れることとは何であらうか。ウォルツにとってこれは自明である。そ

それは「バランス・オブ・パワー」と「戦争」である (Waltz 1979: 67)。そして戦争の要因を、政治指導者の特性、政府の形態、経済システム、社会制度、政治的イデオロギーなどから考える方法を還元主義と呼んだのである。それでは、一体、国際政治のどのような特徴が同じ結果（戦争）をもたらしているとウォルツは考えているのであろうか。「国際政治のアナーキーの特性が永続していること、これが、数千年にわたる国際関係の性質に驚くべき同一性があることを説明する」 (Waltz 1979: 66)。アナーキーの説明はさておき、ここでウォルツが強調するのは、国家の属性および国家間の相互作用についていくらデータを集めたとしても、そこから国際政治の結果について、直接、推論することはできないという点である (Waltz 1979: 66)。なぜなら、アクター、アクターの特性、アクターの相互作用は千差万別であるにもかかわらず、同じ結果が生じているとしたら、アクターのレベル以外の要因が作用しており、それを探求する必要があるからである (Waltz 1979: 68)。

これまでの議論を要約すると、ウォルツは、国際システムといわれる状況の中に、繰り返し登場する現象があると考えている。それはバランス・オブ・パワーと戦争である。人類の歴史はまさに戦争の歴史であったと言っても過言ではない (コーン 1998)。この戦争はなにゆえ起こるのか。アクターの指導者の性格、政治体制、経済体制、あるいはイデオロギーなどが考えられる。これらはアクターそれ自体の属性に関する要因である。しかし、戦争の要因を見てみると、けっして一様ではなく、一概に戦争の要因を特定できない。それにもかかわらず、戦争が繰り返し起こってきているということは、アクターの属性やアクターの相互作用のレベルからは考えられない要因が働いているのではなかろうか。つまり、アクターに還元できる要因ではなく、アクターを構成しているシステム全体にかかわる要因が存在するのではないかとウォルツは考えた。それがアナーキーである。ただ、ウォルツは構造をきわめて重視しているも

のの、構造決定論者でないことに注意する必要がある (Buzan et al. 1993: 23)。「構造は原因として作用するが、その唯一の原因というわけではない」 (Waltz 1979: 87)。「構造もユニットも結果を決定しない」 (Waltz 1986: 328) ともウォルツは述べている。

3 システムと構造

本節では、ウォルツのシステム、構造、アナーキーといった鍵となる概念を考察することにしたい。

(1) システム概念について

「システムとは、相互に作用しあうユニットのセットと定義される。ひとつのレベルでは、システムは構造からなり、構造とはシステム・レベルの構成要素である。これによって、たんなるユニットの集合ではない、ひとつのセットを構成するものとして、ユニットを考えることが可能になる。もうひとつのレベルでは、システムは相互に作用するユニットからなる」 (Waltz 1979: 40)。

システム理論の目的は、この2つのレベルがどのように作用しあっているのか、この2つのレベルを区別するものは何かを明らかにすることとされる。つまり、システム理論と言えるためには、システム・レベルと相互に作用しあうユニットのレベルをどのように区別するかが重要となる。こうした要請から、構造の定義からユニットの属性やユニット間の関係は排除されなければならない。これによって初めて、ひとつの構造が別の構造に変化する、いわゆる構造それ自体の変化と、同じ構造の中でユニットの相互作用が変化することとが区別される (Waltz 1979: 40)。しかし、ここで注意しなければならないのは、システム理論とは、システムがユニットの行動および相互作用をどのように決定するかを示すものではない、とウォルツが考えている点である。つまり、国際

関係におけるシステム理論は、つぎのことを明らかにしてくれる。まず、異なる国際システムがどの位の期間継続し、どの程度平和なものかである。もうひとつは、システムの構造が相互に作用しあうユニットにどのように影響し、逆に相互に作用しあうユニットが構造にどのように影響するかである (Waltz 1979: 40)。したがって、ウォルツのシステム理論は、けっして構造がユニットに及ぼす影響、とりわけ構造がユニットの行動を制約する要因として働くことだけを論じているのではない。それよりも、システムの違いによって、ユニット・レベルとシステム・レベルの要因がどのような割合で原因となるかという点に関心がある (Waltz 1979: 48-49)。

繰り返しになるが、「システムは構造および相互に作用するユニットからなる。構造はシステム全体に及ぶ構成要素であり、これにより、システムをひとつの全体として考えることが可能になる」 (Waltz 1979: 79)。そして、システム・レベルとユニット・レベルを区別するために、システム・レベルの構成要素、つまり構造は、ユニットの特性、ユニットの行動、ユニット間の相互作用を考慮せず、あるいは抽象化して定義されなければならない (Waltz 1979: 79)。そうしなければ、国際政治システムの結果が、ユニットそれ自体に関連する変数によって生み出されたのか、それとも、システムの変数によったのか、区別がつかなくなる。ここでウォルツが強調しているのは、ユニットの相互作用もユニット・レベルで起こっているということである。したがって、それ自体はユニット・レベルの現象である。これに対して、ユニットがどのように配置されているかということは、ユニットの属性ではなく、システムの属性である (Waltz 1979: 80)。

還元主義者のアプローチは、主要なアクターという点から国際政治を説明しようとする。国際政治理論を構築しようとする行動アプローチは、アクターの行動、戦略、国家の相互作用に関する前提を組み立てることに重点を置く。しかし、ユニット・レベルの前提によって、システム・レベル

で生じる現象を説明できるのであろうか、という疑問をウォルツは提示する (Waltz 1979: 69)。たとえば、第1次世界大戦、あるいは第2次世界大戦の原因を探った文献を見ても (ジョル 1987; 入江 1991; 細谷・他 (編) 1993)、多くの国が戦争を回避しようとし、あるいは回避できる機会があったにもかかわらず、世界戦争というシステム・レベルの現象が起こっている。さまざまなアクターの行為が多様な結果と合致しない場合、システム的な原因が作用しているとウォルツは考える (Waltz 1979: 69)。つまり、ユニット・レベルではなく、システム・レベルで作用している力によって、結果を説明できる。その場合、この<説明>とはどういう意味なのだろうか。ウォルツは3点を明らかにしている。第1は、予期された結果がなぜ一定の範囲内に収まるかである。第2は、行動パターンがなぜ繰り返されるかである。第3は、できごとがなぜ繰り返されるかである。そして、システムの構造は、制約力として、一定の方向性を与える力として作用する。そしてこれが正しければ、システム理論はシステム内における継続性を説明し、予測を可能にする (Waltz 1979: 69)。

ウォルツによれば、理論は説明する力と予言する力を有する。理論はまた簡潔 (エレガント) でなければならない。社会科学理論におけるエレガントとは、説明および予言が一般的であるという意味である。つまり、国際政治理論は、戦争がなぜ繰り返し起こるかを説明し、戦争が起こると考えられる条件を示す。けっして特定の戦争が起こることを予言するのではない (Waltz 1979: 69)。もちろん、システム理論は万能というわけではなく、システム理論はシステム間の変化を説明し、システム内の変化を説明するものではない (Waltz 1979: 71)。

このシステム理論を国際政治にあてはめるとどうなるか。それは、国際レベルで作用している力に対処し、国内レベルで作用している力に対処するものではない。システム・レベルとユニット・レベルの力が両方とも作用している場合、外交政

策の理論を構築しないで、国際政治の理論をどのようにしたら構築できるかの問題である (Waltz 1979: 71)。システム理論というのは、システムがシステム内で相互に作用しあうユニットに対して、制約する力、あるいは一定の傾向を与える力として作用するという理論である。ここから、ユニットがどのような行動をとるか、そしてユニットの運命がどうなるかについて推測できるようになる。システムにおいてユニットが生き残りを望み、繁栄したいとするなら、ユニットが相互にどのように競争し、調整するかである。つまり、システムがユニットの自由をどの程度制限するかによって、われわれはユニットの行動およびその結果を予測できるようになる。システム理論は、異なるユニットがなぜ同じ様に行動するか、そして、ユニットにさまざまな違いがあるにもかかわらず、一定の予期された範囲内に結果が収まることを説明してくれる。逆に、ユニット・レベルの理論は、システム内において同じ様な位置づけにあるにもかかわらず、さまざまなユニットがどうして異なる行動をとるのかを説明する。その意味で、外交政策に関する理論は、国家レベルの理論である (Waltz 1979: 72)。

(2) 構造の意味

ウォルツによれば、構造には2つの意味がある。構造は結果を一定の狭い範囲内に収めておく働きをする。この典型的な例として、人間の肝臓は血液中の血糖値を一定の範囲内に収める働きを担っている。この種の構造をウォルツは<エージェント>あるいは<装置>と呼んでいる (Waltz 1979: 73)。そして、ウォルツ自身、この意味で、<構造>という語を用いているのではないとしている (Waltz 1979: 73)。「構造とは制約条件のセットを意味する」 (Waltz 1979: 73)。こうした構造はセクターとして機能する。そして、国際政治構造は<エージェント>ではなく、<セクター>であると述べる。その意味は、アクターの一定の行動に対して、報償を与え、あるいは逆に罰を加えることによって、アクターの行なっ

てよい行動は何か、あるいはしてはいけないことは何かを指示しているという。つまり、<エージェント>と<セクター>の違いは、前者が量的問題としてアクターの行動の範囲を定めるのに対して、後者は質的問題として、アクターがとってよい行動を選択する。したがって、構造は原因ではあるが、通常の因果関係でいうところの原因ではない。なぜなら、構造の存在によってアクターの結果が、直接、生じるわけではないからである。これに対して、<エージェント>はまさに直接的に結果をもたらす。

つぎに、構造は結果に対してどのようにして影響を及ぼしているのであろうか。ウォルツは、<アクターの社会化>と<アクター間の競争>の2つを挙げる。そして、これらを<プロセス>と呼んでいる (Waltz 1979: 74)。社会は、法律や規則といった公式の方法によらず、自然発生的に行動規範を確立する。社会のメンバーの多様性に比べ、観察される行動の多様性はさほど多くない。つまり、社会のメンバーは、通常、社会の行動規範にしたがって行動する。これが社会化である。社会化は行動の多様性を減らし、規範を遵守するよう働きかける (Waltz 1979: 75-76)。これに対して、<競争>は、社会にもっとも受け入れられ、成功する行いは何かをアクターに教えてくれる。そうすると、<競争>によって、成功しているアクターを模倣するという現象が生まれてくる。その結果、<社会化>同様、アクターの行動の多様性および結果の多様性を減少させる役割を果たす (Waltz 1979: 77-78)。

それでは、構造変動とは何か。「構造はその部分の配列によって定義される。配列の変化のみが構造変動である。システムは構造と相互に作用しあう部分からなる。しかし、構造と部分は、現実のエージェントおよびエージェントシーとは関連するが、同一ではない。構造は、われわれが見る何か、ではない」 (Waltz 1979: 80)。ウォルツもこのように構造それ自身をわれわれが見ることができない実体としてとらえているわけではない。「構造は抽象観念であり、システムの物質的特性を

数え上げることによって定義できない。それに代わり、〈システムの部分の配置〉と〈配置の原理〉によって定義されなければならない」(Waltz 1979: 80) と、ウォルツは述べる。ここで注目しなければならないのは、物質的特性から構造を定義することができないという点である。というのは、コンストラクティヴィストのウェントは、ウォルツの構造が主として物質から定義されていることを批判しているからである(Wendt 1999: 252)。こうなると、ウォルツの構造は一体何からできているのか、ウォルツの主張を見ていこう。

(3) 構造の原理

ウォルツは、構造をつぎの3つの原理から明らかにしている。第1に、構造において、アクターが秩序づけられる原理である。たとえば、政治アクター(ユニット)は、支配-服従というハイエラルキーな関係によって規定されているのか、という問題である。国内政治システムにおける構造は、中央集権的であり、かつ階層的である。一方において、命令する権限を有する者がおり、他方においてそれに従わなければならない者が存在する。これに対して、国際政治システムにおける部分の関係はどうなっているのでしょうか。「公式に、個々の部分は他のすべてと平等である。命ずる権限を有する者もいなければ、誰も従う必要もない。国際システムは非中央集権的であり、アナキーである」(Waltz 1979: 88)。したがって、秩序は国家より高次の権威によって強制されず、形式的に平等な政治アクターの相互作用から生まれる(Donnelly 2000: 17)。さらに、ウォルツはアナキーという概念について考察を加えている(Waltz 1979: 89)。なぜなら、構造というのは本来的に組織的な概念であり、構造は何らかの秩序を意味していると考えられるからである。ところが秩序を与える原理がアナキーということになると、そもそも秩序が存在しないのではないかと考えられてしまい、構造とアナキーは概念として矛盾する。

これに対して、ウォルツはつぎのような問題設定をする。「秩序を提供する者が存在しないのに、いかに秩序を考えることができるか、公式の組織がない場合に、いかに組織の影響を考えることができるかである」(Waltz 1979: 89)。この問いに対して、ウォルツはミクロ経済理論を用いて答えようとする(Waltz 1979: 89-91)。しかし、当然のことながら、ウォルツ自身、こうしたミクロ経済理論は理論にしかすぎないことを理解しつつ、一般的に予期されることを知るにはきわめて有用であると考えている(Waltz 1979: 91)。ミクロ経済理論の詳細についてはすでに論じたので(信夫 2002)、ウォルツが国際政治システムをどのようにとらえているかを見ていくことにしよう。

「国際政治システムは、経済市場同様、利己的なユニットの相互作用によって形成される。国際構造は、ひとつの時代の主要な政治的ユニットという点から定義される。それは都市国家、帝国、民族といったようにである。構造は国家の共存から生まれる。いずれの国も意識的に構造の形成に参加するのではないが、その構造によって、すべての国が制約を受けることになる。国際政治システムは、経済市場同様、もともと個人主義に端を発し、自然に生まれ、意図されたものではない」(Waltz 1979: 91)。ただし、ここで、国際政治が構造的に経済市場と類似しているというのは、経済市場において、自助の原理が働いている場合に限る(Waltz 1979: 91)。政府の関与によって自助の原理が働かないならば、国際政治システムとの類似性はなくなる。

そして、ミクロ経済理論の類推から、ウォルツはきわめて重要な前提を行っている。それは、「国家は生き残り(サバイバル)を確保しようとする」(Waltz 1979: 91)というものである。これはもちろん、現実がそうであるというのではなく、ウォルツが前提にしているということである(鴨 1990: 34-35)。国家の目的あるいは動機にはさまざまなものが考えられる。たとえば、ある国は世界征服の野望を持つかもしれないし、他の国は孤

立主義を望むということも考えられる。わが国における徳川時代の〈鎖国〉はまさに孤立主義の実際例である。ウォルツが〈生き残り〉を国家の目的として措定した理由は、国家はさまざまな目的を達成しようとするが、そのためには、まず国家が〈生き残って〉いなければならない、ということにある。

第2に、ユニットの機能に差異があり、特化しているのか、それとも、機能は同じなのかという問題である。国内政治構造においては、ユニットはそれぞれ異なる機能を担い、その意味で、分業体制が確立されている。一般には、立法、行政、司法という形で表現される。たとえば、米国の場合には、立法の機能は議会に、行政の機能は大統領に割り当てられている。これに対して、英国やわが国の場合には、立法と行政の機能は議院内閣制という形で、米国のように厳格に権限が分離していない。国際政治構造においては、国家は機能という点においては同じである (Waltz 1979: 93)。つまり、それぞれの国家は、別々に存在し、自律し、形式的には平等な政治ユニットであり、そのインタレストを実現するためには、最終的には自国の資源に頼らなければならない (Donnelly 2000: 17)。国家は、通常、国家に必要とされる機能はどの国も同じように果たしている。たとえば、Aという国の防衛という機能をBという国が担当することになれば、Cという国がDという国の司法の機能を担うこともない。これは国際政治構造がアナーキーであり、国家は〈自助〉を原理として行動することから導かれる必然的結果である。つまり、国家は自律的な政治ユニットであるという意味において、それぞれの国家は他のすべての国家と同様の機能を果たしている。その意味で、これは、国家が主権を有することと同じである (Waltz 1979: 95)。先に、国内政治構造においては、秩序原理としてのハイレアルキーとユニットの機能の分化とがセットになっていると述べたが、国際政治構造においては、秩序原理としてのアナーキーと同様の機能を担うユニットがセットになっており、政治的機能という点で国際分

業はない。国家に機能的な差異がないとするなら、国家の何に差異があるのであろうか。

第3に、ユニットの能力 (capabilities) の分布が挙げられる。いわゆる2極とか多極と言われるものである。ハイレアルキー・システムにおけるユニットが相互にどのように関連するかは、ユニットが果たす機能の差異とユニットの能力の程度によって決定される。アナーキー・システムにおいては、ユニットの機能に差がないので、同様の機能を果たす能力の大小が、国際政治構造のあり方を決定する。そして、国際政治においては主要な国、いわゆる大国が重要となるので、国際政治構造は、主として大国の数がいくつあるかを数えることによって決定される、とウォルツは考える (Waltz 1979: 97)。国際秩序は大国の数によって変わってくる。歴史的には、国際政治構造は、大国の運命の変化によって規定される (Waltz 1979: 72)。そして、「ひとつのシステムの構造は、システムのユニットを越えた、力の分布の変化に応じて変動する。そして、構造変動は、システムのユニットがどのように振る舞うかについて、ユニットの相互作用が生み出す結果についての期待を変化させる」 (Waltz 1979: 97)。

さて、問題は、ウォルツがなにゆえ国家の能力のみを構造の定義の中に含めたのかである。ここで、ウォルツが能力の分布と述べ、パワーの分布とどうして表現しなかったかである。能力とはアクターの属性あるいは保有するものをさし、伝統的に、能力の分析の対象は、観察可能な軍事力や経済力が中心である (Evans 1998: 61)。ウォルツも、能力という場合、主として、軍事力と経済力に焦点をあてている (Waltz 1979: 131)。この点が、ウォルツの構造が唯物論的であると称される所以である。これに対して、とくに米国における伝統的な用語法では、パワーは支配と同義に扱われる。つまり、パワーとは他者に望まないことを行なわせる能力である (Waltz 1979: 191)。この場合、パワーはかならずしも観察可能なものに過ぎない。パワーという用語を用いると、それは支配を意味してしまい、さらに、物質的でなく、

測定 of 困難な要因も含まれる。そこで、ウォルツは、有形で物質的なものを意味する能力 (capabilities) という用語を用いている。国家には、能力以外にも、イデオロギー、政府の形態 (権威主義や民主主義)、経済制度 (市場経済や計画経済)、平和愛好度、好戦度などといった特性も考えられる。ウォルツが能力を用いた背景には、国家は相手の国家の意図を知ることができないということがある (たとえば、平和愛好度とか好戦度などは主観的である)。つまり、「相手がどう選択するかは分からないが、何を材料にして選択するかは分かる」という弱い形の共通認識 (共約性) を前提」 (村上 1992: 154) にしていると思われる。この場合の目に見える<材料>が<能力>である。

さらに、ウォルツが強調するのは、国家の能力それ自体は、ユニットの属性であるが、国家の能力の分布は、システム全体に及ぶ概念であるという点である (Waltz 1979: 98)。国際政治の場合には、大国を中心に、大国の数がいくつあるかによって構造が決定される。もうひとつの問題は、ユニットの相互作用に関して起こってくる。つまり、ウォルツはユニットの特性だけでなく、ユニットの相互作用も構造の定義から排除されなければならないとしている (Waltz 1979: 98)。相互作用とは、国家が他国に対して有する敵・味方の感情、外交関係、同盟、経済取引の量などをいう (Waltz 1979: 99)。こうした相互作用の問題は、とくに、同盟関係の場合などに明瞭に現れてくる。たとえば、5カ国が2つの同盟に分裂した場合、これは2極システムなのかである。ウォルツはこれを2極システムではなく、依然として多極システムであるという。なぜなら、2極システムというのは、第3国が上位2カ国に挑戦できないようなシステムだからである (Waltz 1979: 98)。結局、国家の特性ならびに国家間の相互作用は考慮されず、能力を基礎に大国を数え、国際構造が決定される。

ここで、構造に関して、ウォルツに沿ってまとめておこう (Waltz 1979: 100-101)。第1に、構造はシステムが秩序づけられる原理によって定義

される。システムは、ある秩序原理から別の秩序原理に変わると変容する。したがって、アナーキーな世界からハイエラルキーな世界に移行することは、ひとつのシステムから別のシステムへの移行を意味する。しかし、現実には、こういった移行はこれまでの国際関係史においては一度もなかった。第2に、ユニットの機能に差異がある場合、その機能が特化することによって、構造は定義される。機能が違い、あるいは、機能の割り当てが異なってくると、ハイエラルキー・システムは変化する。アナーキー・システムにおいては、第2の定義によるシステム変化は考えられない。なぜなら、システムは機能的に同様の働きをするユニットから構成されるからである。第3に、構造はユニット間の能力の分布によって定義される。この分布の変化は、システムがアナーキーであるか、ハイエラルキーであるかを問わず、システムの変化であると考えられている。

4 国際システムの安定 (バランス・オブ・パワー理論)

国際システムがアナーキーだとするなら、国際システムでは国家間の戦争がつねに繰り返されるのであろうか。国際システムの安定を主要国間の戦争がないことと規定するなら、その条件として、ウォルツはつぎの2つを挙げる (Waltz 1979: 161-162)。ひとつが、国際システムがアナーキーのままであることである。他は、システムを構成する主要当事国の数におおきな変化が起こらないことである。そして、これら主要当事国間のバランス・オブ・パワーが保たれることが、国際システムの安定にとって不可欠となる。こうして、ウォルツは、<バランス・オブ・パワー>を国際政治におけるもっとも重要な理論と位置づけ、つぎのように述べる。「国際政治学に特有の政治理論があるとするなら、それはバランス・オブ・パワーである」 (Waltz 1979: 117)。まず、国際政治のシステム論があり、その理論の発展形式としてバランス・オブ・パワー理論が考えられている

(Waltz 1979: 123)。ウォルツは、これまでのバランス・オブ・パワー理論、とりわけモーゲンソーにみられるあいまいなバランス・オブ・パワー理論を極力排除することに力点を置いている¹⁷⁾。ウォルツのバランス・オブ・パワー理論は、ある意味では、きわめてシンプルであり、アナーキーと国家に関するいくつかの前提にもとづいているだけである。そこで、その前提から見ていくことにしよう。

(1) アナーキーと国家に関する前提

ウォルツが考えるアナーキー、つまり「自然状態」というのは、「戦争状態」である。しかし、これは、戦争が絶えず起こるという意味ではなく、個々の国家が武力を用いるか否かを決定する権限を有していることから、戦争はいつでも起こりうることを意味している (Waltz 1979: 102)。このアナーキーは同時に「自助システム」でもある。したがって、ウォルツの描くアナーキーは、無政府状態であって、戦争状態であり、「自助システム」でもある。この自助システムについて、ウォルツは、「ユニットがその目的を達成し、そしてその安全を保持しようとするなら、アナーキーの状況にあるユニット——人々、企業、国家、あるいは何であれ——は、ユニットが生み出すことができる手段、および、ユニットが自らのためになし得る準備に依存しなければならない。自助は、必然的に、アナーキーの秩序における行為原理である」 (Waltz 1979: 111) と述べる。つまり、「自助システム」とは、自らの身を守ってくれるものは誰もおらず、自らの身は自分で守るという意味である。

さらに、ウォルツはバランス・オブ・パワー理論を展開する場合に、国家に関してつぎのような前提を置いている (Waltz 1979: 118)。

- 1) 国家は単一のアクターであり、最低限、自らの保全を求め、最大限、全世界の支配に駆り立てられる。
- 2) 国家は、生き残りという目的を達成するた

め、適切な手段を用いようとする。この手段はおおきく2つに分けることができる。ひとつは国内における努力である。これには、経済力を増大させる、軍事力を増強させる、巧みな戦略を発展させることなどが挙げられる。他は、対外的な努力である。これには、自らの同盟を強化・拡大する、敵対する同盟を弱体化・縮小させることなどが挙げられる。

- 3) 自助システムの中に2カ国、あるいはそれ以上の国が共存する。

以上のようなアナーキーと国家の前提にもとづいて、バランス・オブ・パワーはどのようにして生まれるとウォルツは考えているのであろうか。自助システムとは、自らを保全しようとし、あるいは、他者と較べ効果的にそうすることができない者は繁栄できないだけでなく、危険にさらされ、悪影響を被るというシステムである。こうした結果をまねくおそれがあることから、それを回避するため、国家はバランス・オブ・パワーの形成へと向かうという。ただし、アクターすべてが、合理的であるとか、意思が一貫している必要はない (Waltz 1979: 118)。この理論を単純化すると、だれかがうまくやるなら、他のものはそれを見習うか、さもなければ危険な状態にさらされ、場合によっては滅んでしまうかもしれない、ということである。もしすべての国が自らを保全しようというインタレストを失えば、このシステムは作動しなくなる。ただ、一般には、それは考えにくい (Waltz 1979: 118-119)。つまり、バランス・オブ・パワー政治が機能するには2つの条件があればよい。ひとつは、秩序がアナーキーであること、もうひとつはそのアナーキーの中に生き残りを望むユニットが存在することである (Waltz 1979: 121)。その意味で、まさにミクロ経済学的な均衡、つまり、市場における「見えざる手」による均衡と同じように考えられている (信夫 2002: 420-421)。古典的なバランス・オブ・パワー理論のような balanサーは必要ない。

(2) 2極によるバランス・オブ・パワー理論

国際システムの変動には、2つの可能性がある。ジョン・ラギーの用語を用いるならば、＜システムの変動＞と＜システム内の変動＞である (Ruggie 1986: 140)。システムの変動とは、アナキーの構造がハイエラルキーの構造に変容することである。近代国家システムの歴史において、こうした変動は一度も起こっていない。実際、こうしたことは、まさにアナキーの構造それ自体によって妨げられている。ハイエラルキーの領域では、潜在的に支配的な勢力（たとえば、選挙における主要な候補）が出現すると、最初は、それに対してバランスを保つという動きが出てくる。しかし、その成功の潜在的可能性がある点を超えて高くなると、＜勝馬に乗る＞ (bandwagoning) ということによって恩恵を受ける可能性が高くなる¹⁸⁾。対照的に、アナキーの領域では、潜在的に支配的な勢力が出現すると、ある点に到達するまでは＜勝馬に乗る＞ことが起こるかもしれない。しかし、成功の可能性が高まると、今度はそれとバランスを保とうとする動きが出てくる、とウォルツは考える (Waltz 1979: 123-138)。これこそが、ウォルツのバランス・オブ・パワー理論の中心的結論である。したがって、国家の能力の相対的な変化に国家はつねに配慮しなければならない。大国のパワーの増大は自国にとって脅威となり、恩恵はない。そして、これは構造的な要請として作用し、国家が実際にバランス・オブ・パワーを保とうとするか否かという外交政策の問題とは異なる。システムの構造的制約にしたがう国家は少なくとも生き残ることができ、したがわない国家は滅びるかもしれない。

システムの変動は考えにくい。これに対して、システム内の変動は、能力の分布の変化によってもたらされる。近代国家システムの歴史では、多極という分布が3世紀にわたって続いてきた。もちろん、この間、大国の地位について国に変化はあった。一方、2極は、第2次世界大戦以降、30年以上にわたって続き、ウォルツによれば、それ

は＜強固＞なようであるという¹⁹⁾ (Waltz 1979: 162)。著名な冷戦史家J・L・ギャデイスは、このことを「ロング・ピース」と称している (ギャデイス 2002)。予測可能な将来において、政治的能力と軍事力を発展させる可能性があるのは統合ヨーロッパだけであり、この種の変化をもたらさう候補である。しかし、その見通しは明るいとはいえないとウォルツは考える (Waltz 1979: 180)。

国際政治システムにおいて、システム内の変動しか考えられず、その可能性も多極か、それとも2極かということになると、安定、平和、集合的できごとの管理にとって、どの位の大国の数が適当であるかが問題となる (Waltz 1979: 134)。さらに、1970年代には、国際政治学における主要な理論のひとつとして相互依存論が登場した。そこで、この相互依存という考えがシステムの安定にとって役立つのかどうか、ウォルツにとり重要なテーマとなった。ウォルツは、システムの安定にとってどのような構造が望ましいかという視点から、バランス・オブ・パワー理論、とりわけ、多極システムと2極システムの分析を行っている。

多極あるいは2極と言う場合、どのようにして極を数えるのか。ウォルツが極を数える場合に着目しているのは、人口ならびに領土の規模、資源の裏付け、経済力、軍事力、政治的安定性といった能力である。歴史横断的に国家をランクづけるのはむずかしいが、どの国がその時代における大国であるか、微妙なケースでは疑問もあるが、一般的な合意をみいだすことはできる、とウォルツは述べている。力の政治として国際政治を見た場合、国際政治は少数の国からなるシステムの論理という点から研究することができる (Waltz 1979: 131)。そして、一般論として、ウォルツによれば、自助システムでは、参加者の数が少なくなればなるほど、相互依存の程度は低下し、偶発的な戦争が勃発する機会が減り、大国はシステム全体を考えて行動するので、地球規模の問題の解決も容易になる傾向にあるという。また、一般に、

同盟あるいは再同盟の対外的なゲームには、3カ国あるいはそれ以上の国が必要である。そこで、通常、バランス・オブ・パワー・システムには少なくとも3カ国以上が必要であると言われる。しかし、ウォルツはそうではないという。その理由として、2大国のシステムでもバランスの政治は継続することが挙げられる。その際、対外的な不均衡を補う方法は、主として国内における努力である（Waltz 1979：118）。以下、経済的相互依存、安全保障、地球規模の問題を中心に論じる。

(3) 経済的相互依存

経済的相互依存を考える場合、国内と国際の違いを明らかにしておくと分かりやすい（Ruggie 1986：137-138）。国内では、ユニットは自由に経済的に特化しうる。なぜなら、ユニット間の相互依存の影響は、政府によって管理されているからである。経済競争が繰り広げられるとしても、それは協調的な政治的枠組みの中に組み込まれている。その結果、個々のユニットの間で行われる分業は、全体にとって利益となる。これに対して、国際的にみると、自助の原理により、国家は機能的にまったく同じになる傾向がある。その結果、相互依存を推し進めることは、国家にとって脆弱性の源泉になるというのが、ウォルツの経済的相互依存に対する基本的な考え方である（Waltz 1979：104-107, 143-144）。

ウォルツは相互依存をつぎのようにとらえている。多くの人々は、相互依存の度合いが高まると、平和の機会も増えると考えているようである。しかし、相互依存の度合いが高まると、接触の機会が増え、偶発的に紛争が起きる確率も高くなる。もっとも悲惨な戦争とか犠牲者の多い戦争は、同質の人々が住む地域で起こってきている。何らかの形で参加者が関連し、それにより、戦争が起こっている。相互に依存し合う国家の関係が規制されないとすると、それらの国家は紛争を経験し、ときには暴力を伴う紛争になる。相互依存は戦争の機会を増やす、というのがウォルツの主張である（Waltz 1979：138）。したがって、ウォルツの考

えでは、システム内のユニットの数が少なくなればなるほど、ユニット間の相互依存の度合いは低くなる。具体的には、多極システムよりも2極システムの方が相互依存の度合いは低い。ウォルツの相互依存は、当事者が相互に依存するという意味であると同時に（Waltz 1979：143）、相互の脆弱性としてもとらえられている（Waltz 1979：139）。

システムが変動することによって、相互依存はどのように変化するとウォルツは考えているのかを見ていく。相互依存というのは平等な能力を有する国家間の関係である。国家間の能力の不均衡が増大すると、相互依存の度合いは減少する。ヨーロッパを中心とした過去3世紀にわたる国際政治は、第2次世界大戦をもって終焉した。それは、5カ国あるいはそれ以上の国が平和的な共存を求め、ときには、支配をめぐる対立した。第2次世界大戦以降の約30年間では、米ソはそれぞれの世界とは別々に行動してきた。とくに第2次世界大戦以降、米ソはそれぞれ自給自足的であった。米ソ両国は経済的に相互に依存する度合いが低かった（Waltz 1979：144）。

ウォルツが問題にしている相互依存とは、あくまでもシステム・レベルの相互依存であり、大国間の相互依存である。システムの相互依存の程度は、大国の依存の度合いに比例する。ウォルツによれば、相互依存の程度は、第2次世界大戦以前よりも、以後の方が低くなっているという。また、ウォルツの相互依存は、概念的であり、経験的なものではないとも述べる（Waltz 1979：145）。ここでウォルツが強調していることは、ユニット・レベルの相互依存とシステム・レベルの相互依存の違いである。国際ビジネスの増大や国際的な活動の増大といったユニット・レベルの相互依存の拡大は考えられる。しかし、これはけっしてシステム・レベルの相互依存の増大と同じではない。相互依存の度合いは、大国の数が減少するにつれて低下するとウォルツは考える。そして、大国の数が2つというのがもっとも少ない。国家の規模がおおきくなるほど、国内で行われるビジネスの

規模もおおきくなる。したがって、これがまた相互依存の必要性を減少させる (Waltz 1979: 145)。

(4) 軍事的安全保障

つぎに、安全保障の分野を考えてみよう。アナーキーのシステムは、組織原理の変化、あるいは、主要な当事者の数が変化することによってのみ変動する。前述のように、ウォルツの分析では、過去3世紀にわたって、多極システムが続いてきた。もちろん、大国の相対的な能力の増大によって、ある国がトップ・ランクから滑り落ち、他の国がその地位に上がっていくという繰り返しはあった。このシステムは、メンバーの変化にもかかわらず持続してきた。これに対して、2極システムは過去30年間にわたって続いてきた (1979年当時から見ても)。米ソに匹敵する能力を持った第3国が登場できなかったからである (Waltz 1979: 162)。

さて、パワーのバランスを保とうとすることは、戦争が発生する可能性を低くするだけでなく、逆に、その可能性を高くするという面も有している。とくに、多極システムでは、大国の数が多すぎ、同盟国と敵対国との間に明確な線を引くことがむずかしくなる。また、同盟のバランスの計算はむずかしくならざるを得ない (Waltz 1979: 168)。しかし、この不確定性は、システム内における大国の数を減らすことによって、減少させることができる。ここで、能力の集中の程度が問題となる。ラギーにしたがって、ウォルツの主張をまとめるとつぎのようになる (Ruggie 1986: 137)。システム全体の安定性——システム全体におよぶ戦争が存在しないことと定義される——は、大国の数がもっとも少ないときに最大となる。これは、ちょうど、システム全体に関心を有し、システムの要因を管理する一方的な能力を有するアクターが存在するような場合である。世界帝国の出現——この状態では国際政治はまったく国内政治化される——を防ぎながら、もっとも望ましい状況は、2大国によって支配されるシステムである、とウォルツは考える。2極システムでは、軍事的な相互依存の度合いは、経済的相互依存以上に低下す

る。ロシアもアメリカも軍事的には主として自国に依存している。これらの国がバランスを保っているのは、同盟という＜外部的な＞手段ではなく、自国の軍事力の増強という＜内部的な＞努力によってである。つまり、同盟よりも自国の能力に頼ることになる。国内の努力でバランスを保つ方が、対外的にバランスを保つよりも信頼でき、正確である。国家は、敵対する国の軍事力や信頼性よりも、自国の相対的な力を判断する方が誤りは少ない。不確定性や計算違いの方が戦争の原因になる。したがって、2極の世界では、不確定性が減少し、計算がより容易になる。こうしたことから、2極の方が安定的であるとウォルツは考える (Waltz 1979: 168)。

(5) 地球規模の問題

最後にウォルツが対処しているのは、4つのpといわれる問題である。それらは、汚染 (pollution)、貧困 (poverty)、人口 (population)、核拡散 (proliferation) である (Waltz 1979: 139)。汚染は、今日の用語で表現すれば、地球環境問題であろう。これらの問題は、「国際管理」あるいは「地球規模の問題の管理」と呼ばれている。そして、これらの問題は、＜小さな決定の専制＞によって支配される (Waltz 1979: 108)。それはどのような意味なのだろうか。国内社会では、個々の行動は、何らかの中心的な機関によって明確にされ、よりおおきな社会財を望ましいと考え、個人が制約を受ける場合がある。しかし、国際システムは、よりおおきな社会財のために、自ら行動できる実体ではない。したがって、数多くの問題がグローバル・レベルで見られるにもかかわらず、問題の解決は、各国の政策に依存している (Waltz 1979: 109)。しかし、国家の政策は自助の構造により制約を受ける。したがって、＜国際管理＞のできごとや性格は、グローバルな問題に対する手段を受け入れることができるかによって決定される。その場合、その受け入れ可能性は個々のユニットによって計算され、達成される目的が望ましいか否かという計算によるのではない

い。たとえば、現下の地球環境問題への対処は、各国が受け入れ可能かどうかを個別に計算して行われ、地球環境問題を根本的に解決するという最終的な目的にしたがって行われてはいない。その結果、国際的な管理は、すべての関連当事国がもっと対策をとる必要があるということに同意しているにもかかわらず、次善の策がもたらされる傾向にある (Waltz 1979: 109)。

＜小さな決定の専制＞を逃れる唯一の方法は、構造を変えることである、とウォルツは指摘する。つまり、「われわれは政府の代理人を探し求めなければならない」 (Waltz 1979: 196)。国際機構は政府の代理人にはなりえない。そのシステムを効果的に管理するため、国際機構は自らに依存する国家を管理し、保護する手段が必要になる。そうした手段は国際機構に依存する国家からのみ獲得できる。しかしながら、その管理する力がおおきくなればなるほど、「それを管理する闘争に従事する国家のインセンティブも強くなる」 (Waltz 1979: 112)。その結果、権威を集権化することからはほど遠い、パワーのバランスを保つことがおこってくる。「強力な構造的影響をただす唯一の方法は、構造の変動である」 (Waltz 1979: 111)。ウォルツにとって、政府にもっとも近い状況は、大国の数がもっとも少ないとき、その可能性がもっとも高くなる。「大国の数が少なくなればなる程、いくつかのもっとも強力な国とそれ以外の多くの国との差が広がり、少数の大国がシステムのために行為することがより可能になる」 (Waltz 1979: 198)。したがって、ウォルツの結論は、「[大国の数は] 少ないよりももっと少ない方がよい」 (Waltz 1979: 134) というものである。

5 ウォルツ理論の評価

(1) エージェント－構造問題とウォルツ理論

エージェント－構造問題とは、エージェント (国家) と国際システム (国際構造) との関係をどのように概念化するかを扱う。社会科学、とりわけ社会学においては、これまでも、＜社会と個

人＞、＜構造と主体＞、＜構造と行為＞、＜有機体論と機械論＞、＜全体論と原子論＞など、さまざまな形でエージェント－構造問題が語られてきている²⁰⁾。また、最近では、ミクロ・マクロ問題とも呼ばれるようになっている²¹⁾ (長谷川 1993; アレグザンダー・他 1998; 片桐 2000: 4-11)。この問題は、「個人行為者の自律性を前提とする方法論的個人主義と、社会化を重視し、行為の社会的規制性を前提とする方法論的集合主義」 (長谷川 1993: 15) をどのような形で整合させるかとして論じられる。

国際政治理論において、エージェント－構造問題が議論されるようになったのは、1980年代後半以降である²²⁾ (Wendt 1987)。社会学における問題の本質は、個人と社会の関係をどのようにとらえるか、つまり、個人の自由意志を尊重するか、それとも、社会という環境が個人に及ぼす影響を重視するか、ということになる。ただし、考えてみれば、人間は社会の中に生まれ、社会なくして人間にはなれない (ポルトマン 1961)。ただ、同時に、人間は自分を生み出した社会を変化させる可能性も秘めている。したがって、これは、にわとりが先か、たまごが先かという議論と似たところがある。これを国際政治に置き換えてみると、国家と国際構造がどのような関係にあるのか、ということになる。一方の端に、国際関係は、国家および国家間の相互作用によって規定される、という考え方がある。構造よりも国家のインタレストや相互作用が重視される。これは、伝統的リアリズムの見方に近いかもしれない。そして、もう一方の端に、国家および国家間の相互作用は、国際構造によって規定される、という考え方がある。これは、ウォルツに代表される。また、この両極端の間に、エージェントと構造の相互構成、あるいは、相互決定を重視する見方もある。これは、ウェントによるエージェント－構造問題の解決法である。このエージェント－構造問題では、構造とは何か、構造は国家の何にどのような影響を及ぼすのか、あるいは、国家が構造のあり方になんらかの影響を及ぼすのか、といったことが明らか

にされなければならない。以下では、ウォルツ理論について、このエージェントー構造問題の視点から整理してみたい。

ウォルツ理論をエージェントー構造問題という面から見ると、構造が国家行動に及ぼす影響が圧倒的におおきことがわかる。つまり、エージェントやその相互作用が、構造に及ぼす影響はほとんどなく、また、構造が変動する余地もきわめて小さい。もちろん、それは、ウォルツが国際構造から国際政治をとらえようとしたことの帰結である。しかし、冷戦終焉を契機に、ウォルツ理論によって、本当に、国際政治のおおきな変動を説明できるのかという疑問が提起された。

すでに明らかにしたように、ウォルツは構造の性質を3つの面から概念化している (Waltz 1979: 79-101)。第1が秩序原理である。秩序原理とは、構造の要素が組織化される原理をいう。この原理は、国内政治においてはハイレアルキーという上下関係であり、国際政治においてはアナキーという水平的な関係である。つまり、国際政治においては、国家に上位する権威や権限は存在しないことを意味する。第2がユニットの特性、つまりユニットが果たす機能である。ただ、アナキーが支配する国際政治においては、国家はすべて同じ機能 (国内における秩序維持ならびに対外的な防衛) を果たしていると考えられる。したがって、この要因はすべてのユニットにとって同じであり、考慮する必要がないとされる。第3が能力の分布である。アナキーは不変であり、ユニットの機能の差異を考慮しないとすると、残るは国家の能力の分布である。この能力の分布の違いが構造変動の要因になると考えられる。ただ、この能力の分布に関して、ウォルツが強調するのは、能力それ自体はユニットの属性だが、ユニットの能力の分布はシステム全体の属性であり、ユニット・レベルに還元できない、という点である (Waltz 1979: 97-98)。また、この能力とは、物質的能力 (capabilities) を意味する。したがって、それ以外の国家の属性、たとえば、民主主義国家であるか権威主義国家であるか、国家のイデオロ

ギー的な違い、敵・味方の意識などはすべて捨象される。

ウォルツは国家に関してどのような前提を置いているのかを見ていくことにしよう。ウォルツの基本的前提は国家の具体的な意図を考慮しないという点にある。つまり、国家の意図とは関係なく、国際構造による国家行動への影響それ自体を明らかにしようとするものであった。しかし、国家はたんに環境からの刺激に反応して行動するアクターではない。現実には国際社会で国家が行為するためには、何らかの意図や動機を指定しなければならない。ウォルツは国家の動機として2つの前提を置いている。ひとつは、国家が、最低限、生き残り、あるいは自らの安全を求める、というものである (Waltz 1979: 91, 118)。アナキー下においては、安全が最上の目的であり、他の目的を遂行できるのは、あくまでも国家の安全が確保された上でのことだからである (Waltz 1979: 126)。他は、国家は<利己的な>アクターであるということである (Waltz 1979: 91)。これは、自己の安全を最優先し、他者の安全を顧みることがないことを意味する。

つぎに、プロセスの問題に移ろう。ウォルツの主張によれば、構造はエージェントの行動に間接的に影響を及ぼすことによって、エージェントと関連している。構造は<セクター>としての役割を果たす。その方法として考えられているのが、<競争>と<社会化>という2つのプロセスである (Waltz 1979: 76)。ただし、ウェントが指摘するように、ウォルツのプロセスの理解にはかなりあいまいなところがある (Wendt 1999: 318)。

まず、競争によって、社会的にもっとも受け入れられる、あるいは、成功する方法を取り入れたエージェントに繁栄がもたらされ、そうでないエージェントは罰せられる。これによって、行動ならびに属性の類似性がもたらされる (これは社会化も同じである)。ここでいう属性とは、国内秩序の維持や対外的な防衛といった、国家が国家として存立するための機能をいう。競争は秩序をもたらし、秩序を担うユニットは、自律的な決

定と行為を通して、ユニット間の関係を調整する (Waltz 1979: 76)。しかし、このウォルツの競争の記述をみると、競争という相互作用によって<秩序>がもたらされるようにも読める。しかし、本来、ウォルツが考える秩序はアナーキーとエージェントの能力の分布によって決まるはずである。また、ウォルツは、競争の結果として、ユニットは互いに似たようなものになるとも述べている (Waltz 1979: 77)。ただし、この意味として行動が類似してくるのか、それに止まらず、競争によって自然淘汰的にユニットの数が減り、結果として、類似したユニットのみが生き残ることを意味するのかは明らかでない (McKeown 1986: 53)。ウォルツは、国家の死亡率 (滅亡率) がきわめて低いことも指摘する (Waltz 1979: 95)。ということは、競争というプロセスは、自然淘汰的な機能を有しているわけではないようにも考えられる。

つぎに、社会化に関してであるが、ウォルツが社会化を論じるのはいささか奇妙な印象を受ける (Wendt 1999: 101)。というのも、ウォルツは国際システムを論じ、国際社会を論じてはいない。また、ウォルツの国際システムの構造は、秩序原理としてのアナーキーとユニットの能力の分布により規定され、社会という用語によって一般に想起される規範、ルール、制度といった概念が入り込む余地はない。社会化の対象は、競争の場合と同様、エージェントの行動と属性である (Waltz 1979: 76)。まず、ウォルツが社会化の対象にしているのはエージェントの行動である。社会化によってもたらされるのは定型化された行動パターンである。行動パターンを生み出す主観的要因は生き残り以外考慮されていない。したがって、行動パターンが生みだされるのは、そこに規範が存在するという意味ではない。ウォルツに規範という概念は存在しない²³⁾。また、属性に関して言えば、国家は社会化によって同様のユニットになる。

なお、構造変動に関しては、構造の性質で触れたように、ウォルツの場合、2つの可能性がある。

ひとつは秩序原理の変化、つまり、アナーキーからハイエラルキーへである。しかし、これは、結局、国際政治が国内政治化されてしまい、国際政治を論ずる意味がなくなる。もうひとつが、エージェントの能力の分布である。ウォルツによれば、ウェストファリア体制以降、17世紀中頃から第2次世界大戦までは多極構造が支配し、同大戦以降は2極構造が支配していた。したがって、近代の国際政治においては、1度だけ構造が変動したことになる²⁴⁾。

以上がウォルツのエージェントー構造に関する理論である。この理論からエージェントである国家は、どのような行動をとると予測できるのだろうか (Wendt 1999: 102-103; Terriff et al. 1999: 37)。第1に、国家はパワーのバランスを保つ傾向にあるということである (Waltz 1979: 102-128)。アナーキーの世界は自助システムであるので、国家は他国を頼りにできない。他国の攻撃を抑止するには、自国の国力を増強するか、それが十分でない場合には、他国と同盟を結ぶ必要がある。つまり、内部的な努力によるバランスと外部的な努力によるバランスが必要になる。第2に、国家は絶対利得よりも相対利得に関心を示す (Waltz 1979: 105)。国家は相対利得が経済的なものであっても、つねに軍事的優位へと転化されることを懸念しなければならない。第3に、社会化のプロセスにより、国家は同様のユニットになる。第4に、ウォルツは多極システムよりも2極システムの方が望ましいと指摘する。ユニットの数をできるだけ少なくすることによって、潜在的な脅威に対する不確実性を可能なかぎり減らすことができるからである。

今日、ウォルツ理論と言え、批判が中心である²⁵⁾。しかし、現代国際政治理論における論争の原点に位置づけられるのがウォルツ理論である。その意味で、ウォルツ理論が出発点となって、多くの論争が巻き起こされ、その後の国際政治理論の発展に貢献したことは評価してよいだろう。つぎに、ウォルツは、システムの構造という視点から国際政治のおおきな流れを分析しようとした

(Keohane 1986b: 193)。そして、国際政治システムにおいて、なにゆえ、バランス・オブ・パワー・システムが繰り返し形成されるかが説明されている (Keohane 1986b: 174-175; Buzan et al. 1993: 23)。とくに、これまでの国際政治理論は、ウォルツが指摘するように、システム論と呼ばれる理論も還元主義であり、国際政治に特有の構造の問題が、直接、分析されてこなかった。この点がこれまでの古典的リアリズムといわれる<ネオ>リアリズムとの決定的な違いである (Wæver 1997: 17)。古典的リアリズムでは、権力欲といった人間性、あるいは、国内政治におけるダイナミクスが分析の中心であった。これらはきわめてあいまいであり、異論も多かった (Buzan et al. 1993: 23-24)。たとえば、人間性の本質などから理論構築しようにも、それ自体、論証可能ではない。人間の本性に関して性善説と性悪説があることから明らかである。これに対して、ウォルツは、このような論証不能なところから理論を構築するのではなく、国際社会の構造から演繹する形で、科学的な理論を構築しようとした。

(2) 「学」としての国際政治

ウォルツ理論の最大の問題点は、その理論自体に構造変動を説明する要素をほとんど含んでいないという点にある。ウォルツは、「国際政治の構造は、高度に一定のままであり、パターンが繰り返され、そして事象は際限なく繰り返し起こる」 (Waltz 1979: 66)と述べる。しかし、このような構造の理解で、果たして、われわれは国際政治事象を十分に説明できるのであろうか。たとえば、ラギーは、ウォルツ理論では、中世から近代への移行を説明できないと批判した (Ruggie 1986)。また、ナイは、「ウォルツの理論的な網の目には、横糸がほとんどないので、非常におおきな魚でもその網をくぐりぬけてしまう」 (Nye 1988: 244)と比喩的に述べる。確かに、ウォルツ理論は、あまりにも静的であり、国際政治の不変性だけが強調されている。

たとえば、冷戦の終焉を考えてみたい。ウォル

ツによれば、冷戦は、ある意味では、国際政治の常態である。ただし、ウォルツにとっては、その冷戦が熱戦に発展しないことが重要なのであり、その状態が続くこと自体は、何ら問題にされることはない。前述のように、ギャディスは、いみじくも、このことを「ロング・ピース」と表現したのである。そこで、ウォルツ的な能力の分布を国際政治構造の原点として考えた場合、果たして、この冷戦という2極構造は、本当に、終焉したと言えるのだろうか。2002年5月24日、米国のブッシュ大統領と、ロシアのプーチン大統領は、「戦略攻撃戦力削減条約」に調印した。その中で、「戦略核弾頭を2012年12月31日までに各1700~2200発まで削減」することがうたわれている (『朝日新聞』2002年5月25日)。そして、これは、両国が、現在、保有する戦略核弾頭を3分の1にまで減らすことを目的にしている。ということは、米口は、それぞれ、およそ6000発という膨大な数の戦略核を保有していることになる。ウォルツ的な見方では、2極構造は、依然として、続いている。しかし、その一方で、われわれは、このような2極構造をもはや冷戦とは呼んでいない。このことは、戦略核弾頭の数といったまさに国家の物質的能力とは異なる要因によって、構造を考えなければならぬことを示唆しているように思える。そうして、こうしたことを考える契機は、すでにウォルツ理論の中に胚胎していたのではないとも考えられる。最後に、このことについて考察してみたい。

ウォルツの場合、国家は<生き残り>という安全保障によって主として動機づけられているエゴイストである (Waltz 1979: 91; Waltz 1996: 54)。ただし、ウォルツ理論によれば、こうした国家からなる世界は、自然状態であり、それは同時に、戦争状態でもある (Waltz 1979: 102)。しかし、国家が<生き残り>を望むというだけで、戦争が勃発するであろうか。ランダル・シュウェラーの言葉を借りれば、<生き残り>を望む国からなる世界は、「全員が警察官で、どろぼうはまったくいない」 (Schweller 1996: 91) 状態である。侵

略の意図を有する国がまったくなければ、アナーキーと自己保存だけでは、リアリズムが想定する戦争状態にはならないのではないか、という疑問がある (Schweller 1996: 91)。つまり、侵略もなければ、戦争もなく、対立もない。＜互いのことに口を出さずにやっていくこと＞が実践的なルールである。シュウェラーが指摘するように、「大規模な戦争の多くは、自らの安全よりも拡大に価値を置いた国家によってまさに引き起こされてきた」 (Schweller 1996: 106) のである。

この＜生き残り＞を望むということに、何らかの意味をウォルツは付与しているのではないだろうか²⁶⁾ (Wendt 1999: 104-105)。それは、国家はすでに保有しているものを確保したいだけなのではないかということである。したがって、国家は他国を征服したいとか、あるいはシステムのルールを変更したいとは考えていない。国家が安全を求めることを前提にして、ウォルツは暗黙の内に、このような国は＜現状を維持したい国＞と考えているのではないだろうか。ウォルツはモーゲンソーといった古典的リアリストとは異なり、パワーの極大化を国家のインタレストとして措定しなかった。これによって、安全保障のジレンマを回避することが可能になる。その意味で、ウォルツによる国家のインタレストは、過剰なパワーの追求への戒めが込められていると思われる。なぜなら、国家のインタレストとして、＜現状を変更したい＞ということ仮定することも可能だからである。＜現状を変更したい国＞は、領土を拡大したい、他国を征服したい、あるいは、国際システムのルールを変更したいというインタレストを有する国である。ただ、ウォルツの措定する国家は、＜現状を維持したい国＞である²⁷⁾ (Wendt 1999: 104-105)。

こうした＜現状を維持したい国＞からなるアナーキーでは、能力の劣る国も生き残ることが可能である。というのも、基本的に国家は他国を征服したいというインタレストを有しないからである。その結果、国家の＜死亡率＞はきわめて低くなる (Waltz 1979: 137)、というウォルツの説明

は納得のいくものとなる。これに対して、＜現状を変更したい国＞からなるアナーキーでは、互いに征服を試みるので、国際政治はきわめて不安定な状態になると思われる。その結果、能力の劣る国の死亡率は高くなるだろう (Wendt 1999: 105)。このように、＜現状を維持したい国＞と＜現状を変更したい国＞の違いを明らかにすることによって、一見すると客観的と思われる能力の分布も、国家のインタレストによる違いが反映されているのではないかと考えられる。

アナーキーの意味が、国家のインタレストによって異なるのではないかと主張したのはウェントである。つまり、不変と考えられるアナーキーの性質も、国家のインタレストの分布によって決定されるのではないかと、ということである (Wendt 1999: 103-109)。国際政治の構造が＜インタレストの分布＞により影響を受けるとするならば、国家が何を望むかによって構造変動が可能になる。現状維持を望むのと現状変更を望むのでは、異なるアナーキーが出現する。現状変更を求める国家間のアナーキーの論理は、死ぬまで戦うという形をとり、現状維持を求める国家間のアナーキーの論理は、軍備競争と交渉になり、相手国を滅亡させるまでには至らない (Wendt 1999: 106-107)。もしウォルツの原点がこうしたインタレストの分布にあるとするならば、われわれはアナーキーに関してかなり異なる世界を描くことができる。ウェントは、「アナーキーとは、国家が思い描くものである」 (“Anarchy is what states make of it”) という有名なキャッチフレーズを作り出している (Wendt 1992)。

このことは、ウォルツの構造の定義が、物質的な能力の分布のみを重視し、それ以外の国家のインタレストやアイデンティティ、あるいは、国家間の相互作用を無視しすぎているのではないかと、という疑問へとつらなる。本来、アクターの特性とアクター間の相互作用以外に構造が変動する要因はない。たとえば、ウォルツにおいても、構造変動が起きるのは、大国であるアクターの数が増えるときである。元々、アクターの能力それ自

体の変化が基礎にあり、システム・レベルにおけるアクターの能力の分布が問題になる。したがって、構造変動には、何らかの形で、アクターの属性ならびにアクター間の相互作用の変化が存在しなければならない。しかし、ウォルツの場合、それらを分析することは還元主義となってしまう、分析の対象から除外される。ここに、ウォルツの構造変動がきわめて考えにくい原因がある。

そこで、もう一度、ウォルツの還元主義批判に戻って考えてみよう。このウォルツの還元主義のとらえ方に対して鋭い批判を行ったのはウェントである。ウェントが問題にするのは、還元主義とは「全体は部分の属性および相互作用を知ることによって理解される」(Waltz 1979: 18)という中の、〈および相互作用〉という部分である。ウェントは、部分の属性と部分の相互作用ではまったく別個の問題であるという²⁸⁾。なぜなら、相互作用は、属性だけでは予測できない創発的結果を有するかもしれないからである。ウェントによれば、属性理論は厳密な〈内から外〉への方法で説明されるが、相互作用論は対外的な状況の面も含まれ、したがって、〈外から内〉という面を有しているという(Wendt 1999: 145)。これは、デュルケムの動的密度やコヘインとナイの相互依存研究にも通ずる問題である²⁹⁾(Keohane and Nye 1989: 260-264)。そして、ウェントはこの相互作用の問題をシステム・レベルの構造の問題とは異なる構造の問題として取りあげる必要性を強調する。

ウェントは相互作用をユニット・レベルと構造レベルの間に位置する明確な分析レベルとして扱う必要性を強調する。そして、相互作用を構造の理論化の範囲内にきちんと位置づけ、相互作用レベルが〈構造〉を有しているのであり、〈構造〉を有すると認められるべきであるという。相互作用の構造の性質および結果は、ウォルツが論じている構造とは異なるので、ウォルツの見方との混乱を避けるために、ウェントは相互作用の構造を〈ミクロ〉構造と名づけている。相互作用の構造は、エージェントの観点から世界が描かれてい

るからである。これに対して、ウォルツが論じている構造は〈マクロ〉構造であり、システムの観点から世界が描かれている(Wendt 1999: 146-147)。ウォルツ理論にはまったく相互作用レベルの議論が欠けており、それがウォルツの構造変動をあまりにも単純かつ非現実的なものとしているおおきな理由であると思われる³⁰⁾。

ウォルツは、理論は真偽が問題なのではなく、その説明力が問われる、と述べた。確かに、ウォルツ理論は、冷戦構造を説明してくれるが、冷戦終焉後の国際政治の説明においては十分とはいえない。ただ、説明力を高めるために、何が必要かというヒントをわれわれは得ている。それは、国家間の相互作用の分析である。しかし、それは多様であるので、どの相互作用が構造レベルの変動をもたらす要因として考えられるかを見極めるのはむずかしい。しかし、国際政治の構造は、人間の存在や意識を離れ、客観的に存在するとも思えない。物質的能力の重要性は、けっして、無視できないが、それと同時に、国家間の相互作用によって、国際政治のあり方それ自体も変化していくことを、われわれは認識する必要があるだろう。

以上、われわれは、ウォルツ理論の全体像を描き出し、それを批判的に検討してきた。ウォルツは、科学的な「学」としての国際政治の確立を目指した。このことは、今日においても、十分に生きている。たとえば、実証的コンストラクティヴィストのウェントは、国家のインタレストやアイデンティティ、あるいは、国家間の相互作用を論じるとどまらず、観念的とは言え、構造の重要性を十分に承知している。つまり、こうした構造的視点を国際政治に定着させたことが、ウォルツ理論の最大の貢献と言っていだろう。

1) コヘインの国際制度論は、従来、ネオリベラル制度主義(neoliberal institutionalism)と呼ばれてきた。コヘイン自身もこの名称を用いてきた(Keohane 1989: 1)。その後、「ネオリベラル」という呼称をはずし、たんに、制度論者と自らを呼ぶようになっている(Wallander et al. 1999: 3; Keohane 2002: 3)。また、

Keohane 1984には、コヘイン 1998という邦訳がある。なお、コヘインについては、信夫 2003bを参照。

2) コンストラクティヴィズムの分類については、さまざまなものがある。詳しくは、Adler 1997; Hopf 1998; Ruggie 1998を参照。

3) ウェントのコンストラクティヴィズムについては、信夫 2003aを参照。

4) このネオコンは、パワーこそが世界の秩序を維持するのに重要であると考ええる。ネオコンの代表的な論客として、ロバート・ケーガンを挙げることができる。Kagan 2002; ケーガン 2003は、ネオコンを理解する上での必読文献である。ブッシュ政権のいわゆるブッシュ・ドクトリンは、このネオコンの論理をもとに構築されている。ブッシュ・ドクトリンとは、抑止政策から先制攻撃政策へ、封じ込め政策から政権変更政策へ、それに、躊躇の繰り返しから決然とした指導力へ、といわれるものである(Bush 2002)。

5) なお、本稿では、Waltz 1979を中心に検討を行う。すでに同書の出版から20年以上が経過し、その間、冷戦の終焉といったおおきな国際変動があったことから、ウォルツ理論にも変化があったのではないかと懸念があるかもしれない。しかし、最近のWaltz 2000を見ても、ウォルツ理論の基本的スタンスにはまったく変わりが無い。ただ、ウォルツは、冷戦後の世界において、米国が支配的な国であることは認めている。その意味では、1極構造である。ただし、それは一時的な現象であり、長期的には、米国に対して均衡する力が登場すると考えている。したがって、Waltz 1979に依拠したとしても何らウォルツ理論の理解にとって問題がない。

6) わが国におけるウォルツ研究の代表的文献としては、信夫 1988b; 樋野 1988, 1989; 角南 1994; 長谷川 1996, 1997a, 1997b; 南山 1997; 森山 2002を参照。ウォルツのリアリズムは、それまでのリアリズムと区別する意味で、ネオリアリズムと呼ばれる。このネオリアリズムという名称は、アシュレーが初めて用いたとされる(Ashley 1986: 257)。リアリズムのパラダイムについては、信夫 1988a: 212-213を参照。

7) このウォルツの3つのイメージは、その後、シンガーによって分析のレベルへと発展を見ることがになる

(Singer 1961)。

8) ただし、このネオリアリズムの呼称は、本文に述べたような意味で用いられるとはかぎらない。ネオリアリズムの意味の多様性については、坂井 1998: 43-44を参照。また、鴨武彦は、ネオリアリズムについて、つぎのように述べている。「ネオ・リアリズムについての決まった定義はない。しかし私は、ネオ・リアリズムとは、モーゲンソー教授の主張するような古典的リアリズムの思想の旋律とは異なり、国際政治のパワー・ポリティクスのダイナミズムにあつて『覇権安定』(hegemonic stability)の正当性を打ち出すリアリズムの政治思想だとみてもよいと思う」(鴨 1993: 72)。わたし自身は、ネオリアリズムと覇権安定論は異なると考えている。覇権安定論自体は1極構造論であり、それ自体は構造論の見方ではある。しかし、覇権安定論では、構造の秩序原理それ自体が異なっている。つまり、国際システムの構造はアナーキーではなく、ハイレアルキーなのではないかということである。覇権安定論では、ハイレアルキーとアナーキーの繰り返しという構図が描かれている。

9) ユニットはシステムを構成する構成単位である。現下の国際政治でこのユニットは主権国家を意味する。ただし、ウォルツはユニットという用語を用いることによって、主権国家が誕生する以前にもアナーキーな状況は存在し、そこでの構成単位を含めて理解しようとしている。したがって、国家ではなく、ユニットという抽象的な用語が用いられている。また、アクターといった言葉が用いられていないのは、アクターには一定の志向性があると一般に考えられるからではないだろうか。その意味で、ウォルツは国家の目的や意図といったことを連想させるアクターという用語を故意に用いなかったのではないと思われる。

10) 還元主義は古典物理学の方法としておおきな成功を収めた。そのために、科学の方法と考えられている。この還元主義的方法では、実体を個々の部分に分け、その属性と関連性を検討することが必要とされる。全体は、相対的に単純化された要素を研究することによって理解され、分離されたものの間の関係を観察することによって理解される(Waltz 1979: 39)。

11) ただし、人間の本性の分析が重要でないというわけではない。そのアプローチの仕方に問題があることをウォルツは指摘しているだけである。なお、人間の

本性に関する鋭い分析を行っているものとして、ウォーラス 1958; ラヴジョイ 1998を参照。

12) このことを明確に指摘しているのは鴨である。かれは、「モーゲンソーのパワー・ポリティックスの見方で見落されてならないことは、国々が＜パワーをめぐる闘争＞において異なった対外行動様式をとるものと理論の仮定を置いていることである」(鴨 1990: 32)と述べる。ただ、鴨は対外行動様式という言葉の中に、どれだけインタレストを意識していたのかは不明である。モーゲンソーは、実際には、権力に対する3つの異なる態度として、さらに、＜威信政策＞を挙げている。しかし、威信政策は、現状維持あるいは帝国主義に包含されると考えて差し支えないだろう(スミス 1997: 183)。

13) カプランの国際システム理論はかならずしも分かりやすいというわけではない。これから検討するように、概念の混乱などもかなり見られる。ただ、ここでは、あくまでもカプランの国際システム論が、ウォルツによってなにゆえ還元主義と考えられているのかに絞って検討する。なお、カプランの国際システム論については、初瀬 1976; 衛藤・他 1982: 221-230を参照。

14) ただし、カプランは、後に、4種類を追加している。それらは、＜非常にゆるやかな2極システム＞(Very Loose Bipolar System)、＜緊張緩和システム＞(The Détente System)、＜不安定なブロック・システム＞(The Unstable Bloc System)、＜不完全な核拡散システム＞(Incomplete Nuclear Diffusion System)である(Kaplan 1969: 227-233)。

15) カプランが挙げている例は、原始的な部族において、経済的な困窮から、ほとんどの少女が殺され、家族は一夫多妻になるというルールが導かれる可能性がある、というものである。この例で、変容のルールとは、結婚の形態と子育ての慣行が経済的条件に関連するというルールであるという(Kaplan 1957: 9-10)。要は、一定の条件によってどのような変化がもたらされるかを示すルールとでも定義してよいのかもしれない。しかし、ここに挙げているカプランの例は理解できない。

16) なお、カプランの反論については、Kaplan 1979: 1-92を参照。また、Brown 1981も参照。

17) モーゲンソー自身、バランス・オブ・パワーが不

確定性、非現実性、不十分性という3つの弱点を抱えていることを認めている。モーゲンソー 1986: 218-240を参照。

18) Bandwagonとは、パレードの先頭を進む楽隊車である。この用語は、米国の選挙政治から来ていると言われる。ある候補者が選挙で当選する可能性が高くなると、無党派層や投票態度を決めていない有権者、さらには敵対する陣営までも、当選後の分け前を得るため、有力な候補者に味方するようになる。現在の選挙運動はテレビやインターネットが中心であるが、昔の選挙は、パレードが中心であったという。そして、人びとは、楽隊車に飛び乗って(jump on the bandwagon)、支持を表明した。そこから、楽隊車に飛び乗ることは、その候補者の支持に回ることを意味するようになり、さらに、本来の支持者でないのに、勝利の分け前を目当てに支持する人々をさす意味で用いられるようになった(Donnelly 2000: 18)。

19) この記述や将来の予測はあくまでもWaltz 1979執筆時のものである。

20) この問題に関して、とりわけ示唆に富む業績は、富永 1986, 1995である。

21) このミクロとマクロという用語は、国際政治理論においても用いられることがある。ただ、その意味合いはかなり異なる。たとえば、石井 1993は、マクロ国際政治理論として現実主義理論、制度主義理論、構造主義理論を挙げ、ミクロ国際政治理論として対外政策決定理論を挙げている。これらは社会学的な意味でのミクロ・マクロ問題として提示されているのではなく、いわば分析のレベルに対応する形で分類が行われている。因みに、衛藤・他 1982では、国際関係のミクロ分析として、外交や交渉、ナショナリズムや文化が論じられ、国際関係のマクロ分析として、国際組織と国際体系が論じられている。いずれも社会学的な意味でのミクロ・マクロ問題の視点で分析が行われているのではない。社会学におけるミクロ・マクロ問題を知るのに参考になる文献として、橋本 1991; 土場 1994; 海野 1991; 加藤 1995; 片桐 1998を参照。

22) エージェント-構造問題を扱った論文は多数に上るが、代表的なものとして、Bieler and Morton 2001; Dessler 1989; Doty 1997; Friedman and Starr 1997; Suganami 1999; Wight 1999を参照。

23) ウェントはこのことを説明するのに、面白い例を挙げている。「犬がパターン化された行動を採っているとしても、それをわれわれは規範にしたがった行動とは呼ばない。まして、その結果が社会であるとは言わない」(Wendt 1999: 101)。なお、社会化に関して参考になる文献として、Ikenberry and Kupchan 1990を参照。

24) なお、構造変動に関して、構造-機能分析の視点から論じているのが阿部 1999である。阿部は、国際システム構造の変動要因として、「国際社会システム内のパワー分布にもとづいて表出された諸欲求と、これに対するシステム構造を通じて社会的資源の配分との不一致」(阿部 1999: 106)を挙げている。これ自体は、構造-機能分析の当然の帰結なのであるが、興味深いのは、<現状維持勢力>と<現状変更勢力>の2つに分け、国際システムの構造変動を論じている点である。とくに言及している訳ではないが、こうなると、パワーの分布それ自体というよりも、インタレストの分布というウェントの考えに近いのではないかとも思われる。

25) ウォルツへの批判に関しては、以下を参照。Keohane and Nye 1987; コックス 1995; Dunne 1996; Burchill 1996; Linklater 1995; Guzzini 1998; Schoreder 1994。

26) この問題は、Schweller 1994によって提起されているという。なお、立場は異なるが、グリーコはリアリストの立場からこれに気づいていたと思われる。グリーコによれば、国家は防衛的ポジショナリストであるからである。それは、自らのポジションの維持に最大の関心を払う。グリーコの防衛的ポジショナリストについては、Grieco 1990: 10, 28-29, 36-40を参照。

27) この<現状を維持したい国>と<現状を変更したい国>との違いは、現在では、<攻撃的>リアリストと<防衛的>リアリストの議論として現れている。詳しくは、Zakaria 1998: 21-41; Mearsheimer 2001: 17-22を参照。

28) 同じ様な主張として、ハリディ 1997: 43を参照。

29) ウォルツとデュルケムを比較した興味深い文献として、Barkdull 1995を参照。

30) 鴨(1993: 2-9)が、冷戦を「想像上の戦争」と表現していることは、その意味で、まさに的を射ている。能力の分布の変更が冷戦を終焉させたのではなく、「敵味方の体系」という観念的な対立の崩壊が冷戦を終焉させたのであった(鴨 1993: 4-5)。

引用文献一覧

本文および注で引用した文献を、英文は編著者のアルファベット順、邦文は50音順に配列した。

- Adler, Emanuel. 1997. "Seizing the Middle Ground: Constructivism in World Politics." *European Journal of International Relations*. 3(3): 319-363.
- Ashley, Richard K. 1986. "The Poverty of Neorealism." In Robert O. Keohane ed. *Neorealism and Its Critics*. New York: Columbia University Press.
- Barkdull, John. 1995. "Waltz, Durkheim, and International Relations: The International System as an Abnormal Form." *American Political Science Review*. 89(3): 669-680.
- Bieler, Andreas and Adam David Morton. 2001. "The Gordian Knot of Agency-Structure in International Relations: A Neo-Gramscian Perspective." *European Journal of International Relations*. 7(1): 5-35.
- Brown, Chris. 1981. "International Theory: New Directions?" *Review of International Studies*. 7(1): 173-185.
- Burchill, Scott. 1996. "Realism and Neo-realism." In Scott Burchill and Andrew Linklater eds. *Theories of International Relations*. London: Macmillan.
- Bush, George. 2002. "President Bush Delivers Graduation Speech at West Point: Remarks by the President at 2002 Graduation Exercise of the United States Military Academy, West Point, New York." <http://www.whitehouse.gov/news/releases/2002/06/20020601-3.html>
- Buzan, Barry et al. 1993. *The Logic of Anarchy: Neorealism to Structural Realism*. New York: Columbia University Press.
- Dessler, David. 1989. "What's at Stake in the Agent-Structure Debate?" *International Organization*. 43(3): 441-473.
- Doty, Roxanne Lynn. 1997. "Aporia: A Critical

- Exploration of the Agent-Structure Problematique in International Relations Theory." *European Journal of International Relations*. 3(3): 365-392.
- Dunn, Andrew P. 1996. *International Theory: To the Brink and Beyond*. Westport, CO: Greenwood Press.
- Evans, Graham. 1998. *Penguin Dictionary of International Relations*. New York: Penguin Books.
- Friedman, Gil and Harvey Starr. 1997. *Agency, Structure, and International Politics: From Ontology to Empirical Inquiry*. London: Routledge.
- Gilpin, Robert. 1981. *War and Change in World Politics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gilpin, Robert. 1984. "The Richness of Tradition of Political Realism." *International Organization*. 38(2): 287-304.
- Grieco, Joseph M. 1990. *Cooperation among Nations: Europe, America, and Non-Tariff Barriers to Trade*. Ithaca: Cornell University Press.
- Guzzini, Stefano. 1998. *Realism in International Relations and International Political Economy*. London: Routledge.
- Hoffmann, Stanley. 1959. "International Relations: The Long Road to Theory." *World Politics*. 11(3): 346-377.
- Hopf, Ted. 1998. "The Promise of Constructivism in International Relations Theory." *International Security*. 23(1): 171-200.
- Ikenberry, G. John and Charles A. Kupchan. 1990. "Socialization and Hegemonic Power." *International Organization*. 44(3): 283-315.
- Kagan, Robert. 2002. "Power and Weakness." *Policy Review*. 113: 3-28.
- Kaplan, Morton A. 1957. *System and Process in International Politics*. New York: John Wiley & Sons.
- Kaplan, Morton A. 1969. *Macropolitics: Selected Essays on the Philosophy and Science of Politics*. Chicago: Aldine.
- Kaplan, Morton A. 1979. *Towards Professionalism in International Theory: Macrosystem Analysis*. New York: The Free Press.
- Katzenstein, Peter J. et al. 1998. "International Organization and the Study of World Politics." *International Organization*. 52(4): 645-685.
- Keohane, Robert O. 1984. *After Hegemony: Cooperation and Discord in the World Political Economy*. Princeton: Princeton University Press.
- Keohane, Robert O. 1986a. "Realism, Neorealism and the Study of World Politics." In Robert O. Keohane ed. *Neorealism and Its Critics*. New York: Columbia University Press.
- Keohane, Robert O. 1986b. "Theory of World Politics: Structural Realism and Beyond." In Robert O. Keohane ed. *Neorealism and Its Critics*. New York: Columbia University Press.
- Keohane, Robert O. 1989. *International Institutions and State Power: Essays in International Relations Theory*. Boulder, CO: Westview Press.
- Keohane, Robert O. 2002. *Power and Governance in a Partially Globalized World*. London: Routledge.
- Keohane, Robert O. and Joseph S. Nye. 1977. *Power and Interdependence: World Politics in Transition*. Boston: Little, Brown and Company.
- Keohane, Robert O. and Joseph S. Nye, Jr. 1987. "Power and Interdependence Revisited." *International Organization*. 41(4): 725-753.
- Keohane, Robert O. and Joseph S. Nye. 1989. *Power and Interdependence*. 2nd ed. New York: Longman.
- Legro, Jeffrey W. and Andrew Moravcsik. 1999. "Is Anybody Still a Realist?" *International Security*. 24(2): 5-55.
- Linklater, Andrew. 1995. "Neo-realism in Theory and Practice." In Ken Booth and Steve Smith eds. *International Relations Theory Today*. Oxford: Polity Press.
- McKeown, Timothy J. 1986. "The Limitations of 'Structural' Theories of Commercial Policy." *International Organization*. 40(1): 43-64.
- Mearsheimer, John J. 2001. *The Tragedy of Great Power Politics*. New York: W. W. Norton & Company.
- Nye, Joseph S. Jr. 1988. "Neorealism and Neoliberalism." *World Politics*. 40(2): 235-251.
- Rosecrance, Richard N. 1963. *Action and Reaction in World Politics: International Systems in Perspective*. Boston: Little, Brown and Company.
- Ruggie, John Gerard. 1986. "Continuity and Transformation in World Polity: Toward a

- Neorealist Synthesis." In Robert O. Keohane ed. *Neorealism and Its Critics*. New York: Columbia University Press.
- Ruggie, John Gerard. 1998. *Constructing the World Polity: Essays on International Institutionalization*. London: Routledge.
- Schroeder, Paul. 1994. "Historical Reality vs. Neo-realist Theory." *International Security*. 19(1): 108-148.
- Schweller, Randall L. 1994. "Bandwagoning for Profit: Bringing the Revisionist State Back In." *International Security*. 19(1): 72-107.
- Schweller, Randall L. 1996. "Neorealism's Status-Quo Bias: What Security Dilemma?" In Benjamin Frankel ed. *Realism: Restatements and Renewal*. London: Frank Cass.
- Singer, J. David. 1961. "The Level-of-Analysis Problem in International Relations." *World Politics*. 14(1): 77-92.
- Suganami, Hidemi. 1999. "Agents, Structure, Narratives." *European Journal of International Relations*. 5(3): 365-386.
- Terriff, Terry et al. 1999. *Security Studies Today*. Cambridge: Polity Press.
- Vasquez, John A. 1983. *The Power of Power Politics: A Critique*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.
- Wæver, Ole. 1997. "Figures of International Thought: Introducing Persons Instead of Paradigms." In Iver B. Neumann and Ole Wæver eds. *The Future of International Relations: Masters in the Making*. London: Routledge.
- Walker, R. B. J. 1987. "Realism, Change, and International Political Theory." *International Studies Quarterly*. 31(1): 65-86.
- Wallander, Celeste A. et al. 1999. "Introduction." In Helga Haftendorn et al. eds. *Imperfect Unions: Security Institutions over Time and Space*. Oxford: Oxford University Press.
- Walt, Stephen M. 1987. *The Origins of Alliances*. Ithaca: Cornell University Press.
- Walt, Stephen M. 1998. "International Relations: One World, Many Theories." *Foreign Policy*. 110: 29-46.
- Waltz, Kenneth N. 1959. *Man, the State and War: A Theoretical Analysis*. New York: Columbia University Press.
- Waltz, Kenneth N. 1979. *Theory of International Politics*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Waltz, Kenneth N. 1986. "Reflections on Theory of International Politics: A Response to My Critics." In Robert O. Keohane ed. *Neorealism and its Critics*. New York: Columbia University Press.
- Waltz, Kenneth N. 1990. "Realist Thought and Neorealist Theory." *Journal of International Affairs*. 44(1): 21-37.
- Waltz, Kenneth N. 2000. "Structural Realism after the Cold War." *International Security*. 25(1): 5-41.
- Wendt, Alexander. 1992. "Anarchy is What States Make of It: The Social Construction of Power Politics." *International Organization*. 46(2): 391-425.
- Wendt, Alexander. 1999. *Social Theory of International Politics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wight, Colin. 1999. "They Shoot Dead Horses Don't They? Locating Agency in the Agent-Structure Problematique." *European Journal of International Relations*. 5(1): 109-142.
- Zakaria, Fareed. 1998. *From Wealth to Power: The Unusual Origins of America's World Role*. Princeton: Princeton University Press.
- 阿部松盛 1999 「消極的秩序——国際社会システム構造の安定と変動——」星野昭吉・臼井久和（編）『世界政治学』三嶺書房
- アリソン、グレアム T（宮里政玄訳） 1977 『決定の本質——キューバ・ミサイル危機の分析——』中央公論社
- アレグザンダー、ジェフリー・他（石井幸夫・他訳） 1998 『ミクロ・マクロ・リンクの社会理論』新泉社
- 石井貫太郎 1993 『現代国際政治理論』ミネルヴァ書房
- 入江 昭 1991 『太平洋戦争の起源』東京大学出版会
- ウォーラス、グレアム（石上良平・川口浩訳） 1958 『政治における人間性』創文社
- 海野道郎 1991 「個人的行為と社会的結果」『社会学研究』58: 1-23.
- 衛藤藩吉・他 1982 『国際関係論』（第2版）、東京大学出版会
- 片桐雅隆 1998 「シンボリック相互行為論をめぐる二つの争点——ミクロ・マクロ問題と自己の構築主義——」『社会学史研究』20: 71-83.

- 片桐雅隆 2000 『自己と「語り」の社会学——構築主義的展開——』世界思想社
- 加藤彰彦 1995 「<社会構造>と<文化構造>概念の再検討——マイクロ・マクロ・リンクの視点から——」『社会学年誌』36: 96-111.
- 鴨 武彦 1990 『国際安全保障の構想』岩波書店
- 鴨 武彦 1993 『世界政治をどう見るか』岩波新書
- ギャディス、ジョン・L (五味俊樹・他訳) 2002 『ロング・ピース——冷戦史の詳言「核・緊張・平和」——』芦書房
- 黒田俊郎 2000 「社会的構成主義の理論的射程(1)——J.G.ラギーの議論を素材として——」『県立新潟女子短期大学研究紀要』37: 131-146.
- ケーガン、ロバート (山岡洋一訳) 2003 『ネオコンの論理——アメリカ新保守主義の世界戦略——』光文社
- コックス、ロバート W. (遠藤誠治訳) 1995 「社会勢力、国家、世界秩序——国際関係論を超えて——」坂本義和 (編) 『世界政治の構造変動2』岩波書店
- コーン、ジョージ C (鈴木主税訳) 1998 『世界戦争事典』河出書房新社
- 坂井昭夫 1998 『国際政治経済学とは何か』青木書店
- 信夫隆司 1988a 「国際政治理論におけるリアリズムの擡頭(1)」『政経研究』(日本大学) 24(3): 211-239.
- 信夫隆司 1988b 「国際政治理論におけるネオリアリズム——ウォルツを中心として——」『政経研究』(日本大学) 25(3): 167-202.
- 信夫隆司 2002 「ネオリアリズムの系譜——ウォルツを中心として——」『政経研究』(日本大学) 39(3): 401-439.
- 信夫隆司 2003a 「ウェントのコンストラクティヴィズム」岩手県立大学総合政策学会ワーキング・ペーパー・シリーズ 16: 1-108.
- 信夫隆司 2003b 「コヘインの国際制度論」『総合政策』(岩手県立大学総合政策学会) 5(1) (近刊)
- ジョル、ジェームズ (池田清訳) 1987 『第一次世界大戦の起源』みすず書房
- 角南治彦 1994 「K・N・ウォルツの国際構造論に関する一考察——国家・システム関係の再定式化のために——」『国際政治』106: 56-70.
- スミス、マイケル J. (押村嵩・他訳) 1997 『現実主義の国際政治思想——M. ウェーバーからH. キッシンジャーまで——』垣内出版
- 土場 学 1994 「社会学における<マイクロ・マクロ・リンク>の意味」『社会科学論集』(九州大学教養部) 34: 33-59.
- 富永健一 1986 『社会学原理』岩波書店
- 富永健一 1995 『行為と社会システムの理論——構造—機能—変動理論をめざして——』東京大学出版会
- ナイ、ジョセフ・S (田中明彦・村田晃嗣訳) 2002 『国際紛争——理論と歴史——』有斐閣
- 橋本 茂 1991 「社会学におけるマクロとミクロについて——ブラウの理論とホームズの理論の関係——」『社会学研究』58: 25-46.
- 長谷川公一 1993 「マクロ社会学の理論」金子勇・長谷川公一『マクロ社会学』新曜社
- 長谷川将規 1996 「国際理論における「構造—プロセス問題」の研究——K. N. ウォルツの場合(1)——」『早稲田政治公法研究』53: 67-94.
- 長谷川将規 1997a 「国際理論における「構造—プロセス問題」の研究——K. N. ウォルツの場合(2)——」『早稲田政治公法研究』54: 35-64.
- 長谷川将規 1997b 「国際理論における「構造—プロセス問題」の研究——K. N. ウォルツの場合(3)——」『早稲田政治公法研究』56: 59-90.
- 初瀬龍平 1976 「M・A・カプランの国際体系モデル——その批判的検討——」『北九州大学法政論集』4(1): 171-198.
- ハリディ、フレッド (菊井禮次訳) 1997 『国際関係論再考——新たなパラダイム構築をめざして——』ミネルヴァ書房
- 樋野芳雄 1988 「ケネス・N・ウォールツの現代国際政治認識——構造的リアリズムの展開(1)——」『愛知大学文学論叢』88: 25-48.
- 樋野芳雄 1989 「ケネス・N・ウォールツの現代国際政治認識——構造的リアリズムの展開(2)——」『愛知大学文学論叢』92: 1-35.
- 細谷千博・他 (編) 1993 『太平洋戦争』東京大学出版会
- ホブスン (矢内原忠雄訳) 1951 『帝国主義論』(上巻) 岩波文庫
- ホブスン (矢内原忠雄訳) 1952 『帝国主義論』(下巻) 岩波文庫
- ポルトマン、アドルフ (高木正孝訳) 1961 『人間はどこまで動物か——新しい人間像のために——』岩波新書
- 南山 淳 1997 「国際政治理論における認識と方法——ケネス・N・ウォルツを事例として——」『筑波法政』22: 295-303.
- 村上泰亮 1992 『反古典の政治経済学 上 進歩史観の黄昏』中央公論社

モーゲンソー、ハンス J. (現代平和研究会訳)

1986 『国際政治——権力と平和——』福村出版

(2002年12月12日原稿提出)

森山あゆみ 2002 「現実主義理論の再検討——モーゲン
ソーからウォルツへ——」『中央大学大学院研究
年報』31: 477-493.

(2003年2月4日受理)

山本吉宣 2000 「20世紀の国際政治学——アメリカ——」

『社会科学紀要』(東京大学大学院総合文化研究科)

50: 1-88.

ラヴジョイ、アーサー O. (鈴木信雄・他訳) 1998

『人間本性考』名古屋大学出版会

レーニン (宇高基輔訳) 1952 『帝国主義』岩波文庫

Waltz's International Political Theory

Takashi Shinobu

Abstract Kenneth Waltz, a U.S. scholar of international politics, is positioned at the starting point of contemporary international political theories. Waltz's neorealism (or structural realism) is the first attempt to understand international politics scientifically from the perspective of international structure. However, his theory makes too much of the distribution of material implications called national capability, and, as a result, it does not fully cover the end of the Cold War. Therefore, this paper critically examines the total image of Waltz's neorealism and rearranges it from the agent-structure perspective. As a result, it became clear that Waltz's theory made too much of structure's influence on agents, and lacked analysis of agents and their interactions.

Key words Kenneth Waltz, Neorealism, International Structure, Agent-structure Problem, Cold War